
神々の瞳

白苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神々の瞳

【Nコード】

N1371A

【作者名】

白苑

【あらすじ】

人と違った目・・・それは神々の瞳・・・その目を持つ者の物語

湖の出会い（前書き）

幻想的に広がる湖。そこは人を拒絶する雰囲気の漂う場所。人の気配は無くただただ綺麗な湖が広がっている。

人は弱い生き物だ。自分と違うものは認めない。認めようともしない。狭い狭い心を持つ生き物だ。俺もそうだ。

だが俺は普通とは違う。普通の人とは違う。普通をどのように定義すればいいかわからないが・・・。

俺は違う。皆と違う。一つだけ・・・一つだけ違うんだ。

・・・そう、左目が・・・。

湖の出会い

俺は湖を覗き込む。かなり透明度の高い湖だ。新品のガラスを見る時以上に透き通っている感じ。綺麗な水に手を入れてみる。少しひんやりとする冷たさの水をそのまま手で掬い上げ、口まで持つてゆく。「・・・ごくつ」と一飲みする。・・・うむ、うまい。水に對して美味いと感じたことは初めてだ。よくテレビで「この水は本当においしいですね！」なんて台詞よく聞くが水なんて変わらないと思っていたが、今日でその考えを改める。（この水は美味い！）と、俺は心の中で叫ぶ。綺麗な水ってのは味までいいものなのかと関心してしまっていた。

急に背筋がゾツとした。後ろを振り返ったり周りを見渡す。

何か冷たい感じが背筋を襲ったからだ。だが、周りには木々と大きくて綺麗な湖のみ。誰かが俺に殺気を放つ事も確認できないし、何より回りに人が居ない。そのうえ動物すら居ない。鳥の何声すら聞こえない。（こんな森の中なのにおかしい・・・）俺は少しづつ異変に気がついていった。

そう、ここは・・・

「ここは何処だ？」

いよいよ俺の頭はおかしくなったらしい。

「何処だ？ここは・・・」

もう一度自分の頭の中に尋ねるが答えは返ってこない。まさか・

「記憶喪失・・・」

自分の言葉に寒気がする。俺が記憶喪失？・・・そうか、だから

此処が何処だかわからないのか……。ん？でも俺自分の名前わかるぞ？

「杵島 朱鷺」

そう、俺はキシマ トキ。うん、俺は杵島 朱鷺だ。間違いない。何か自分で自分の名前を確かめる物が無いかどうかポケットの中を探る。その時ある事に気づく。

「……学生服」

そう、学生服を着ていた。つまり此処は学校の中？……いや、ありえない。こんな森が学校の中にあるはずが無い。そのうえ湖まである。それに学校の中なら見覚えがあるはずだ。二年生にもなつて学校で迷うなんて馬鹿な事はしない。

俺は一度そこで首を横に振り自分の名前が書いてありそうな物を探す。俺が着ているのは学生服。つまり生徒手帳がポケットに入ってる確率が高い。俺は普段からポケットの中には聖都手帳を入れておく方だ。学ランのポケットに手を入れてみると、

「ビンゴ」

手がポケットの中で生徒手帳に触れたことを確認する。このザラザラ感は間違いなく生徒手帳だ。生徒手帳（仮）を手でつかみ取って見る。……。うん俺の生徒手帳だ。表紙にばっちり名前が書いてある。……。だが俺は安堵感を感じることはできなかった。

「……で、ここはどこだ？」

独り言が今日は多い気がする

「ここは聖域です」

予期していなかった答え。少し高くてきれいな声が背後から聞こえた。俺は反射的に背後に振り返った。そこには 綺麗で 現実味が無くて 彼女は髪をなびかせながら立っていた。

湖の出会い（後書き）

初めて書きます。まだまだ至らぬ点が数多くあると思いますが、これからも読んでもらえるとうれしいです。連載なので有る程度定期的に書きたいと思っています。

偶然の産物

「聖域？」

「はい、聖域です」

なるほど、ここは聖域らしい。．．．いやいや、問題は全然解決していない。なんで俺は聖域なる所に居るんだ？そもそも今日は学校に登校したんじゃないかったのか？いや、待てよ。俺は登校したか？．．．ああ、したな。登校してそうそうチョーク投げつけられたからな。その証拠に学生服に白い粉みたいなのが少しついてるしな俺が「うーん、うーん」なんて唸っていると、

「あの．．．どこか気分でも悪いのですか？」

なんて顔を覗き込みながら俺に尋ねてくる。．．．くそっ、この可愛さはいくらなんでも反則だろ。

「．．．いえ、ちよつと考え事していただけです」

不覚にも少し顔が赤かったかもしれない。今鏡があれば自分の顔の色を確かめてやりたい。

「そうですか．．．あの、でしたら、ここをすぐ離れてください」

「え？あの、どうしてですか？」

俺はちよつと疑問に思う。まさかここで泳ぐのかな？

「ここは聖域です。一般の方が入られる事を禁じられている域です。それに．．．貴方はアイルードの方でもなさそうですし．．．」

「あ、あいるーど？」

何だそりや．．．始めて聞く言葉だ。

「アイルードとはこの聖域を管理している村の名です」

あ、なるほど。つまりここはアイルードって村の管理する聖域なのね。よそ者を寄せ付けないわけだ。だから湖がこんなにも綺麗になってるのか。んで、この美少女はアイルードって村の住人なわけだ。なるほどね．．．ん？待てよ？日本にアイルードなんて村あったか？いや、俺は別に日本中の村の名前を知ってるわけじゃないし、

マニアじゃない。だけどそんな特徴的な名前の村だぞ？ニュースに取り上げられてもおかしくないんじゃないか？

でもまあ、考えても仕方がない。とりあえず此処を離れようか。離れてくださいって言われてるわけだしな。

「そうですか・・・わかりました。すぐ此処を離れますね」

俺は立ち上がった先ほど湖の水を飲んだときに付いた水を手で払った。

「え？」

「ん？どうかしました？」

「あの・・・もしかして湖の水・・・飲みました？」

ん？飲んだのかがどうしたのだろう？・・・ああ、聖域の水だからこの湖の水は聖水なのだろう。それをよそ者に飲まれて不快なのだろうか？でも隠すほどの事でもないよな。

「はい。一口ですが飲みました。もしかして飲んではいけない水でした？」

俺の言葉を聞いた彼女はビックリしていた。

「飲んだんですか！？体はどこも異常はありませんか！？吐き気はしませんか！？」

顔をぐいつと近づけてくる。俺と彼女の距離は、近すぎて図れません！

俺はビックリして体を後ろに反らしながら、かなり心配な目つきの彼女に答える。

「だ、大丈夫ですよ。すごくおいしかったですし。何か問題でもあるんですか？」

彼女の肩を押して俺との距離を開けさせる。・・・こんな至近距離じゃ俺の心臓がいくつあ

つてもたりない。そのうえこんな美少女だ・・・俺には耐えられない。

「この水は一般の方には毒になってしまふんです！飲めるのは【特殊能力】と呼ばれる特殊な能力を所持している人のみです。その水

を飲める貴方は・・・」

彼女は喉を鳴らしてつばをぐくりと飲んでるのがよく解る・・・
・明らかに勘違いだろ。確かに俺の左目は特殊な色だ。普段はそれがわからないように眼帯までつけてる。だけど、別に特殊な能力なんて無い。

「い、いえ、俺はそんな能力者じゃないですよ。たまたま毒が効かなかっただけかも」

「いえ！この湖の水は能力者じゃない人が飲むと100%死に至らしめます！それが飲める貴方は能力者なのです！」

次第に熱弁して、目が、キラキラしている目の前の美少女。

「でもですね、自分は能力なんてもってないですよ？いや、本当に」
「実は毒以外に、この湖にはもう一つ特殊な効果があるんです！」
「なんか更に熱が入ってる・・・」

「いいですか？良く聴いてください。能力者というのはとても珍しい・・・というわけではないのですが、珍しいです。とてもが付かないだけで珍しいです。でも、能力者の方々も生まれたときから能力者な訳じゃないんです。」

「それじゃあ自分が能力者が気づかないじゃないか。」

「いえ、人にはいろいろな転機や危機が訪れます。そのときに能力が発動されます。例えば・・・崖から落ちたときに【浮遊能力】発動・・・それと、ちょっとしたこと。そうですね・・・コップを取りに行くのが面倒でコップを呼んでみたらコップが自分の所に飛んできた・・・なんて事で能力者であることに気づいたりするんですよ」

「へえ、なるほどね。それが湖の効果とどう関係があるの？」

彼女は目を光らせた。どうやらその言葉を待っていたらしい・・・
・てか普通に少し怖い気がする。彼女はこうというのが好きなのだろう。

「良くぞ訊いてくれました！普通能力者は【オーラ】を元にして【サイコキネシス】なるものを発動するわけです。もちろんサイコキ

ネススだけじゃない人が能力者には居るらしいです。自分が意識してみたらオーラを操れました・・・なんて事があるわけです。でも、それは稀です。特にコップの例はすごく稀です。つまり、オーラが発動しないから能力が使えない、サイコネシスが使えない、オーラが操れないって事になるんですよ」

かなり俺にでも解るようにゆっくり丁寧に説明してくれる。よし、この子は性格もきつといいな。目が純粹そうだしな。

「それですね、ここからは貴方の質問の答えになります。つまりオーラが発動すれば後は本人の能力の性質によって能力を上げればいいわけです。そこで人々が飲むのがこの聖水です！」

と、彼女は唐突に左手の人差し指を湖に向ける。

「ん？・・・あ、なるほど。この水を飲むと潜在的に竈っているオーラを開放できるわけだ。でもそれにはリスクがある」

「そうです。それは・・・この水が能力者や、潜在的能力者以外が飲むと毒になるって事です」

そう言うのと、彼女は少しさびしそうな顔で俯く。どうやら自分も能力者になりたいらしいが、怖くて水を飲めないらしい。・・・っていうか

「えっと・・・それじゃあ、俺は・・・能力者？」

全身の汗腺が開いていくのが解る。汗が吹き出てくるし。

「はい！そうです！珍しい能力者です！」

何故か自分の事の用にうれしそうに言う彼女をよそに、俺はうれしい気分になど到底なれなかった・・・なぜかって？それは此処が現実世界じゃないってハッキリしたからさ・・・。

偶然の産物（後書き）

この小説を読んだ方は意見や感想を送ってくださると嬉しいです。
作者の栄養になります。

俺の仕事

「能力者か・・・」

言葉にしてみても全然現実味がない。というか、やっぱり嘘かな？
そもそも能力つてなんだ？実際、目の前を歩いてる子に言わせると、オーラを操れるようになる事らしいが・・・実際あやしいもんだ。
俺自身はオーラが見えるようになったわけでも扱えるようになったわけでもないぞ？俺は「フン！」って歩きながら力んでみる・・・
・やっぱり力を入れて細い腕の血管がほんの少し浮き上がる程度で、別にほかに変わったことはない。

「はああ・・・」

やっぱりため息出ちゃうなあ。そんな、なんだか落胆している俺の前を歩くオカルト好き(?)の美少女が俺の方向に振り返る。

「どうかしたんですか？先ほどから力んでいたり、ため息つかれたりで・・・」

「んあ、聞こえてた？」「バッチシ聞こえてました」

即答されるほどバッチリ聞こえていたらしい。そりゃあそうだよ。なんだかわかんない所に来たと思ったら、いきなり能力者扱いだもんな。普通に人間ならため息の一つや二つするよな。って言うか、この(仮)オカルト少女も少し関係してるんだよ・・・。言いたいことは多々あるがあんまりはつきりした事を言うのも可哀相なので話題転換をしよう。

「いや、ちよつとね・・・えっとそれでまだ町には着かないの？」

「そうですね、後数分で着きますよ」

「そうですか」「そうです」

会話終了

ま、別に気まずい雰囲気でもなかったし、ため息の件も忘れたよ。うだし話題転換は成功かな？しかし、後数分無言で歩くのもなあ・・・。
あ、そうだ。

「そついえば君つて、名前なんていうの？」

まだ自己紹介も済ませていなかった。

「あ、そついえば紹介が遅れました。私、アリサ・リセンリです」

「俺は杵島朱鷺。よろしくね」

俺たちは握手を交わした。

「それにしても、変わった名前ですね？」

「え、そ、そう？」

俺は君のほうが変わってるっていいそうになってしまった。だが、此処が日本でない確率が高い。ていうか、地球ですらない可能性もある。日本でない場合誘拐して事になるが、全然誘拐された時の記憶なんてないし、外傷もない。とりあえず質問をぶつけてみよう。

「ねえ、此処つて地球の何処？というかなんて名前の国なの？」

確信を付く質問。これの質問の返答によつては俺はピンチだ。

「ちきゅうつてなんですか？それにこの世界は王都【トレスト】によつて治められています。そんな事も忘れてしまったんですか？」

アリサは「信じられません」みたいな目で見てくる。うう・・・この質問は失敗だった。どうにかして誤魔化さないと。・・・ん

あ！王道だがこの世界では通じるかもしれない誤魔化し方があるぞ！

「ご、ごめん。俺記憶が吹っ飛んでるようなんだ・・・」

こんな綺麗な子を騙すのは良心が痛むが致し方が無い。

「え？でもさつき自分の名前を・・・」

おいおい・・・やっべ、この子以外に鋭いぞ。天然っぽそうだが案外鋭い。だが俺だつてこんな所で「実は異世界から来たんです」なんて言えない。言つたら（仮）オカルト好きのアリサの餌食になつてしまう可能性が・・・うつ、考えただけでも悪寒が・・・。とりあえず・・・どうにかしよう。

「えつと・・・ぽ、ポケットに自分の名前が書いてある紙があつたんだ」

「あ、なるほど。そういう事だったんですか」

アリサはそう言つと納得したのか、また村に向けて歩き始めた。
はああ、前途多難。とりあえず今度は黙っておこう。町に着くその
時まで・・・

「はい、到着です」

「え？」

俺は顔を上げ、周囲を見渡す。そこには木造の家、家、家、店、
家・・・って

「なんも無いな・・・」

小声で、アリサに聞こえない程度に呟く。いや、だって何も無い
よ・・・店って言ったって、本当にいつの時代の八百屋さん？とか
いつの時代の呉服屋？なんて店だけだ。

「とりあえず村長さん・・・の挨拶は良いとして」

「いいの！？」

俺は右手の甲で突っ込みを入れてしまう。これは仲の良かった大
阪の転校生の突っ込みがうつってしまったのだろう。

「はい、問題ないです。村長さん、今、ご病気で人との面会を拒否
しているので」

「あ、なるほど、そういう事ね」

俺は手をポンツと叩いた。

「それですね、貴方は能力者。でも記憶がない。それにオーラの
使い方を全然知らない用なので、しばらく家に泊まりませんか？」

「え！？いやいや、それは悪いよ。ご両親も男なんて連れてこれら
れも困るでしょ？」

両手をブンブン振って拒否する。アリサと一つ屋根の下なんて無
理ですって。

「良心は亡くなっているんで・・・」

「え？あ、そ、そうなんだ。ごめんね、変な事言っちゃって・・・」

俺は冷や汗を掻きながらあやまる。

「いえ、ずいぶん前の話ですし、全然気にしてないですよ」

何故か無理をしてニッコリ笑うアリサ。この子は一人でいろいろ

と苦勞してきたのだろう。女一人でできることなんて限られてるはずだ。・・・何故だろう？アリサの力になってあげたいって思い始めてきたぞ・・・。

「ん、じゃあアリサの家にお世話になろうかな・・・あ、でも居候するからには仕事は手伝うよ。役に立てるかかわらないけど・・・」
「あ、いえ、そんな悪いですよ。それに私、この村の医者のお手伝いをさせてもらってるだけです・・・」

そう言ってアリサは俯いてしまった。

「そっか、それじゃあ忙しい時にはどんどん扱き使って構わないから」

俺はニコツと笑ってアリサの力になる事を伝えた。口下手で女の子に対して免疫の無い俺にしては十分だ。

「はい、でも貴方には多分貴方の仕事ができますよ？」

「え？仕事？俺に？」

アリサはうなずいて一拍置く。

「トキさんのお仕事は・・・能力者としてのこの村を襲う魔獣の撃退です」

は？

「はい！！！！？」

本日何度目の衝撃だろうか・・・俺は目の前が歪んでゆく感覚の中呆然と立ち尽くしていた。

初めての顔合わせ

魔物・・・そんなもんが居るらしい。・・・いや、初めて聞いたときは（頭おかしいのか？）とか（何かの宗教か？）って思ってたほどだ。実際、魔物やモンスターなんて呼ばれる者を俺は実際に見たことが無い。大体そんなもの居るわけが無いと思っている。現在進行形だ。俺は幽霊否定派。・・・まあそれはいいとして。現実世界でなら、「やっべモンスターが攻めてくるぞ！逃げろ！」なんて言ったら、童話の狼少年と同じだ。誰も相手にしないだろう。・・・それはあくまで【現実世界】の話。現在、俺が居る場所は・・・【異世界】だ。現実世界の常識が通じるかは不明である。なんたってモンスターが出てくるらしい。ま、そんな無駄な文章が多い気もするが、あえて気にしない。長くなっただけ、俺が言いたいのは、

「ここは何処？」

現在、俺は凄く体つきのいいお兄さんと向かい合いながら、現実世界で昔に西洋で使われていたような剣を握り締めて立っている。

「おいおい、今頃そんな話？ここは村の修練所だろ？」

筋肉モリモリのお兄さんは、重そうな剣を片手でブンブン振り回しながら、不機嫌そうな声を出す。どうやら、俺の質問は気に入らなかったらしい。

「いや、それは判ってるんですが・・・」

俺は冷や汗を掻きながら、向かい側に居る筋肉モリモリのお兄さんより、見た目明らかに軽そうな剣を落とさないように持ちながら汗を拭く。俺は、ハンカチは常備してる方だ。

「だったらそんな事訊くなよ」

更に不機嫌そうな声を出して俺を睨みつける。・・・第一印象は、怖い、だ。

「あ、す、すいません・・・」

ギリギリ聴こえるか、聴こえないか微妙な声量で謝る。しかし、それが更に気に入らないらしい。

「ふんっ、たく。何で俺がこんなヒョロヒョロの教育係なんだ？」

睨みつけながら愚痴を零してくる。・・・そんな事はアリサに訊いて下さい。僕はどちらかと言うと被害者です。・・・でもそんな事言える訳が無い。俺は異世界に迷い込んだきた子羊。アリサの家で面倒見てもらわないと、生きていけないのだ。でも、ぶっちゃけ少し怪しいと思ってもある。普通初めて会った男を家に、しかも一人暮らしなのにほいほい家に連れ込むのは、ぶっちゃけた話怪しいまさか、（仮）オカルト好きなアリサにとって、いい餌だったりして・・・いや、そんな事考えてる顔じゃなかったな。大方、俺が記憶喪失なのを心配して置いてくれるのと、能力者として能力をつけて欲しいんだろな。

「戦闘した経験は皆無とされますので、お手柔らかに」

「ああ、殺さない程度にしないとやるよ」

・・・ここに、悪魔一匹発見。人の面した悪魔です・・・。

「でもな、そんなヒョロヒョロな腕じゃ剣を振るう事もままならないだろ？まずは筋力向上だな」

そついうと、お兄さんは剣をしまっ。俺もつられてしまっ。

「でも、何をすればいいんですか？」

自慢じゃないが、家で筋トレなんてした事ない。

「まずは足腰を鍛える。まずこの村の周りを3周して来い」

「え、でも、村の周りとか、魔物がでるんじゃない・・・」

「ん？でるな。でたら走って逃げろ」

無茶苦茶だ・・・魔物の残骸を見たら、なんか犬型っぽいのが居た。そんなのから逃げられる自信なんてありません！俺は「無理無理！」と首を振った。

「安心しろ、骨ぐらいは回収してやるよ。それともなんだ？俺にこの場で殺されたいのか？」

そういうと、ムキムキのお兄さんは先ほど鞘にしまった剣を、また抜き始めた。

「ん？どうなんだ？」「全力で走らせていただきます」

俺はそう即答すると、その場から逃げるように走り去った。後ろから「逃げられたか」なんて聴こえたが無視だ。俺は、3周走りきることを決心して、村の出入り口をスタートラインとして、走り始めた。

実際、俺が走り始めて10分が経つが魔物に追いかけるなんて由々しき事態は起こっていない。なんだかんだ言つて、モリモリオ兄さんも俺の後ろを俺と同じペースで走っている。いちお護衛なのだろう。・・・村を護衛する奴のスタートがこんなのでいいのだろうか？

「おい、どんどんスピードが落ちてるぞ」

返事を返さずに俺は走り続ける。だって無駄に喋って体力を消費しても意味が無いだろ？俺は後ろにいる、モリモリオ兄さんみたいに運動が、これといって得意なわけじゃない。喋りながら走るなんて無理だ。それこそすぐバテてしまう。

残り数分を後ろで剣を振り回されながら追いかけてきたので、俺は全力で逃げた。これはトレーニングじゃなくて拷問、あるいはストレス発散なのだろう。・・・うう、このごろ涙腺が弱いや。でも俺は挫けないぞ！なんてすぐに折れてしまいそんな決心を立てた。

「で、どうだ？ひょうたん小僧には堪えただろ？」

「い、いえ・・・これぐらい・・・屁でも・・・ない・・・です・・・」

俺はこれでもかつ！とさわやかスマイルを演じてみる。もちろん、実際はさわやかな【さ】の字も感じられないスマイルだろうけど・・・。

「けっ言うじゃねえか。ならこれから俺と手合わせだな」「もう死

にそうです」

弱い。弱々弱々である。たった一言に屈服する俺。ああ、俺はなんて情けないのだろう・・・。

赤い髪の少女

いやさ、世の中には理解できない事ってのは一杯あると思うよ？
現に僕は異世界に居るわけだし、能力者なんて存在もいるらしいし。
でも、俺はそれを受け止めているわけよ。でもねでもね・・・これはどうよ？

「・・・なんでアリサが、俺と同じベットで寝てるんだ？」

いや、理解不能。マジで。

いつから一緒に寝てたよ？・・・夜寝る時は一人だったはずだ・・・。

昨晚

「トキさん。お疲れ様です」

玄関のドアを開けたところに居るアリサが俺に労いの言葉を掛けてくれる。・・・これだけで俺の疲れは大半吹っ飛んだ。

「ああ・・・それにしてもかなり疲れたよ・・・あの筋肉モリモリの人・・・俺の事嫌ってるみたいだな・・・。」

「そんな事ないですよ。ただ少し訓練を厳しくするで有名なだけですよ」

「・・・そんな事知っているなら、ほかの人に俺の教育係頼んで欲しかったよ。だって、あの後、剣の素振りや、腕立て、腹筋、そしていきなり実践・・・これが毎日続くのかと思うと寒気が走る。」

「ハハハ、慣れるまで地獄だな・・・」

「そうですね、クスツ、がんばってください」

アリサは微笑みながら俺の心拍数を底上げする。別に狙ってるわ

けじゃないと思うんだけど……。俺みたいに女の子に免疫の無い奴だと、こんな笑顔を見せられたら心臓がいくつあっても足りないな……。

「もうご飯の準備は終わってます。冷める前に食べましょ」
それだけ言い残しアリサはリビングの中に入っていた。

実際、上手かった。家庭的な奴なんだなと、俺は考えを改めた。もうオカルト少女なんて呼ぶのはよそう。そう心に決めた、17歳の夜。

「うん、それで風呂入って一人で寝たんだ」

誰に向けてでもなく呟いた。いやはや、昨日のアリサの飯は上手かった……。ってそうじゃない！今、問題なのはそこじゃない！アリサが隣でなんで寝ていたか！だ。

「まず此処は……。よし。俺に割り当てられた部屋だ」

寝ぼけてアリサの寝床にもぐりこんだ……。なんて事はなかった。「とりあえず、此処を出るか。アリサが起きたらビックリするかもしれないしな」

アリサが俺の寝床に潜り込んだ可能性は有る、が、今は考えないことにした。もしそうじゃなかったら、アリサが起きたらビックリするだろ？俺はいそいそとベットを抜け出そうと……

「おい、さっさと起きろ居候やろう」

アリサではない女の声。その言葉の少し後に、扉の開く……

ガチャ……。スレンダーで綺麗な顔の整い。アリサとはまた違う感じの美少女……。だが、俺にとってその出会いは、地獄への入り口だった……

「で、この居候野郎はアリサに本当になつにもしてないんだな？」
髪が赤くショートカットの美少女が、ナイフ以上に鋭い視線を俺に向ける。

「はい、まったく何もしておりませんし、何もありません。神に誓います」

俺はリビングの床に土下座をして、なんとか誤解を解こうと必死である。もし誤解が解けなかったらこの女にこの場で殺されるか、筋肉モリモリさんに殺されるかも……。どちらにしても死ぬのは勘弁だ。

「悪いね。私、神は信じてないんだ」

ニヤツと俺を見下しながら笑う。……背中がゾクゾクする笑いだ。

「で、ではアリサに聴いてみてください。本つつつつ当に何もしてません」

俺はそう言うときアリサの方に請うような目で、助け舟を期待する。
……紅茶飲んでるし。

「ふんつ。で、アリサ。どうなんだい？」

赤髪少女が紅茶を飲んでいるアリサの方を向く。するとアリサは「ふえ？」なんて声を上げて紅茶を置き、こちらに向きなおす。

「はあ、あんたも当事者なんだよ？ わかつてる？」

「わかつてるよお。でも、本当に何にもなかったよ」

アリサはニコツと赤髪少女とは違い、気持ちのいい微笑を見せてくれる。

「……んじゃ何でアリサがこの貧弱居候野郎の布団で寝てるんだ？」

今度は俺の方を向き、ギロツと睨みつけてくる。

「そ、それは俺が聞きたい……」

「じゃあ何！ あんたは無意識の内にアリサを襲ったわけ！？」

「んなわけあるかつ！」

先ほどまで怖さで敬語を使っていたのが嘘のようだ。

「あのお〜」

「何!?!」

おずおずと手を上げたアリサは、俺たちの声にビクツとして小さくなった。

「私、ベットから落ちてないか心配だったんですよ。それで、見に行ったら気持ちよさそうに寝ていたものですから・・・」

「だから?」

「だから、そのお、で、出来心で・・・」

一瞬で場が沈黙化した。

「・・・まさか出来心でこんな男の布団にもぐりこんだの?」

「・・・そう」

・・・絶句。まさに、絶句、そのものである。気持ちよさそうに寝てただけで、普通布団にもぐりこんでくるだろうか?今までアリサの行動はおかしなものが多いと思っていたがここまでとは・・・。

「・・・もういいわ。私、少し外の空気吸ってくる」

そういうなり赤毛少女はそくさと外に行ってしまった。

「・・・そういえばさ、アリサ。彼女誰なの?」

「あ、そういえば紹介してませんでしたね。彼女はエリサ。エリサ・エスティードです」

「エリサねえ。そんなおしとやかそうな名前とは全然違う人だね」

僕の言葉に、クスクスと笑うアリサ。・・・やっぱり笑ってる顔は可愛い。

「そうですね。でも、今、私の一番の親友なんですよ」

そういうとアリサも外に出て行ってしまった。一人取り残された俺は、

「さてと、今日は休日らしいし、ゆっくりするかな」

俺は自室の布団へと直行した。

その後、エリサに起こされて、エリサの超人的な強さでボコボコ虐められた事は、思い出さたくない思い出の一つとなった・・・。

痛い訓練

この別世界に来て早一週間。来た時は戸惑い、そして不安ばかりが支配していた・・・かな？まあでも、初めて逢った人がアリサだったのが、不幸中の幸いだろうか。なんか能力者なんて事にされちゃったけど、この世界はなかなか楽しい。現実世界でできなかったことが沢山できてる気がする。

俺は基本的にゲームとかはしない方だ。けど外に居るのも苦手だった。だから一人暮らしの家に籠ってた。やっていた事と言えば本を読むくらいだろうか。でも、本の虫と言われるほど好きではなかったけど。実際に一週間本が読めなくても、禁断症状(?)なんてものは出ないし。

そんな引きこもり性質の俺は家でも筋トレとかしてたわけじゃない。だから【ヒヨロヒヨロ】なんて呼ばれることも有る。実際その通りだから否定しないけど・・・。

でも、この世界に来てからは違う。俺も居候の身だし、自分に課せられた事はやってる。なんか無茶苦茶筋肉モリモリの人と訓練したりしてるんだ。たった一週間だけど、少し強くなった気がする・・・。少なくとも打たれず良くなっている。エリサの拷問にも耐えてる。うん、俺、少し立派になった。・・・だけどね、

「無理だろ。いや、明らかに」

そう、俺は、今、この瞬間、エリサと対峙している。まあ、別に訓練なんだけど。

「大丈夫よ、怪我したら先生の所に連れてってあげるから」

先生とはアリサが働いている診療所の先生のことである。だが、俺だって簡単にやれるわけにはいかない。

「ふ、俺だってこの一週間。沢山の虐めや訓練に耐えてきたんだ。やるときは・・・やってやるよ!」

俺は鞘から剣を抜く。名前もまだ教えてくれない筋肉モリモリの人から貰った剣だ。

「そう」

それだけ言うとエリサは4本小剣を抜いた。・・・4本？普通二刀流とかなら判るが・・・。

「エリサ、なんで君は4本の小剣なんだ？」

「ん？どうして？」

「いや、普通なら2本じゃない？」

「そう。それで？私はたまたま4本なだけ」

「・・・あそ」

なぜエリサが4本使うのかの謎は解けなかった。それが判ればエリサの攻撃手段が見えてくると思ったんだけどな。

「それじゃあ行くわよ」

そういうとエリサは2本の小剣を両手でこちらに投げて、飛ばしてきた。・・・飛んできたよ！

「うお?!」

俺は屈んで2本を上手く避けようとする。しかし、小剣は俺の右肩と左肩を少し斬った。

斬った小剣はそのまま後ろに飛んでいった。

「へえ・・・上手く避けたわね。・・・一撃目は」

そういうとエリサはニヤリっと笑った。その笑いに背筋がゾクゾクする。俺はバツと振り返った。そこには後ろに飛んでいった小剣が、ブーメランの要領でこちらに戻ってきた。

「ちっ!」

俺は剣を振り下ろして、左側の小剣を叩き落す。そのまま叩き落したほうに体を移動させて、右側の方の小剣を避けようとするが、上手い具合に俺の脇腹を斬りエリサの右手に戻ってゆく。

「くっ!」

斬られた事によりバランスを崩し、避けた左側へそのまま倒れこむ。立ち上がろうとするのだが脇腹の痛みで立ち上がれない。

「やってやる！なんて言ってた割には、私に一撃も与えられなかったわね」

エリサは堕ちていた小剣を拾い、2本を腰の鞘にしまい、もう2本を俺の首元へ突きつけた。

「ま、ヒヨロヒヨロにしてはがんばったんじゃない？」

それだけ言々とエリサは、もう2本の小剣をしまい、俺へ手を差し伸べる。

「ほら、一人じゃ立てないんでしょ？ 掴まって」

「・・・ああ」

俺は何処で間違えたのか考えながらエリサの肩を借りて、アリサの手伝う診療所へ向かった。

いつも訓練してる場所から数分はなれた所にある、診療所に着いた。

トントン・・・

「失礼します」

エリサはそういうと、中の返事を待たずしてズコズコ中へ入ってゆく。

「まあ、エリサちゃんじゃない？ どうしたの？」

俺はいきなりは入れないと何故か思ったのでドア付近で待機してる。で、中からはちよつと歳の取ったおばあさんみたいな声が聞こえた。優しく、暖かい声だ。

「訓練相手が怪我をしたので連れて来ました。・・・って入りなさいよ」

右腕を思いつきり引つ張られてしまう。今の怪我の状態からだと、かなり！痛い。痛い。

「痛い！痛い！痛いって！」

俺の悲痛な声はエリサの耳には、右から入って左に抜けるような

ものだった。

「あらあら、すごく痛そうね。エリサちゃんにやられたの？」

先生は俺の傷を擦りながら俺とエリサの顔を交互に見る。

「ふんっ、この男が貧弱だからイケナイのよ」

なんだかイケナイの部分強調されてしまった。

「なんだよ、一週間やそこらじゃすぐ強くなれるわけ無いだろ？」

「へえ、やってやる！なんて言っていたのは？」

治療が開始した俺を、エリサはジトーと見てくる。エリサがやる
と更に嫌な感じだ！

「に、人間失敗もあるのさ・・・」

冷や汗を掻きながら誤魔化す。エリサは「あゝそゝ」なんて言っ
て凄く顔は笑っている。

「はい、終わりです。お疲れ様でした」

先生は消毒と包帯を巻いてくれた。いつもはアリサがやる仕事ら
しいが、彼女は今、薬草を買いに行っているところだった。

「そういえばトキさん？一つ気になっていたのですが・・・」

「はい？」

「その右目・・・怪我ですか？ずいぶん変わった眼帯されてますし
・・・」

そついうと先生は右目の眼帯を見る。・・・あまり触れて欲しく
ない事なんだけど・・・。

「あ、いえ、気にしないでください」

「あ、そうだ。ちょうど薬草に漬けた眼帯があるんですよ」

「いえ、本当に気にしないでください」

俺は先生が席を立とうとするのを両手で制止する。

「トキさんこそ、気にしないでいいですよ？お金が気になりますか
？大丈夫です。サービスしますよ」

「・・・俺自身あまり触れて欲しくない事なんです」

静かにそついうと先生は椅子に座り「そうですか」と黙ってしま

い、かなり重い雰囲気になってしまった。

「ふんっ、なによ、重たい空気になっちゃって。そんなものさつさと外しちゃいなさいよ」

そんなセリフと共に俺の眼帯を外そうと実力行使に出てきやがった。

「くっ、触るなって言ってるんだ！」

俺はギロツとエリサを睨みつける。するとエリサは、何かに突き飛ばされたみたいに、診療所の壁に激突した。

「うつ・・・あ、あんた・・・今、何したの？」

エリサは壁に激突した痛みを堪えてる様子で俺を睨みつける。

「お、俺は、別に睨み付けただけで・・・」

それから二人とも黙ってしまった。雰囲気は先ほどよりもずいぶん重たいものになってしまった。

「あ、そういえばアリサちゃんが言ってたわ。『トキさんは能力者なんですよ』って。という事は、今のは能力じゃないのかしら？」

「で、でも。俺、能力の訓練なんてしてないですよ・・・」

俺は顔をうつむきながら答える。

「能力者は肉体の強さと精神の強さがオーラになるらしいわ。トキさんは、訓練で少しずつ能力が使えるようになったんじゃないかしら？」

「それなら私のおかげね」

何故か胸を張るエリサ。・・・いやいや、お前がえばる事じゃないだろ。

「能力の発動か・・・」

俺は誰にも聴こえないように呟く。・・・アリサが知ったらどんなリアクションするだろう・・・。

明日への不安

今、リセンリ家の食卓を三人で囲んでいる。俺、エリサ、アリサ。もちろん、料理はアリサの手作りだ。俺的には、有名レストラン並に美味しいと思われる。・・・有名レストランなんて行った事あるっけ？

まあ、そんな事はいいとして。俺は今、微妙にピンチである。なんせ今日、能力らしきものが発動してしまったのだ。発動された相手はエリサ。エリサがちよろつと能力が発動した・・・なんていえばアリサが興奮するだろう。・・・おそらく、いや、絶対。そうなる就非常によろしくない。今の訓練に更に能力者としての訓練が追加されたら・・・そう考えると悪寒が走る。

で、エリサが発動された事をアリサに言うのは良くないって事。なんで、エリサがこの家に居る間、俺は常にビクビクしている。いや、常にエリサの前では腰の位置が低い。・・・だって怖いよ・・・。

「・・・あんだ、なんで今日はそんなに縮こまってるのよ」

ああ、神様。あなたは僕に試練を与えるのですか・・・俺はエリサの発言で、体がビクツとした。だが、ここで負けていられない！できるだけ平常心を保たねば！

「ん？別に普通だよ？」

少しだけ背筋を伸ばしてエリサを見る。エリサはというと「あそと、興味がなくなったのか、食事に集中しはじめた。内心、凄くほっとしている。」

「あ、そうそう、今日ね、こいつ能力発動したのよ」

「・・・俺は持っていた食器を落としてしまう。だが、そんな事に気づかない程に心臓の音がバクバクしていた。」

「・・・え？」

アリサの目が、カツ！と見開いて俺を見る。

「な、ナンノハナシデスカ？」

「・・・しらばつくれようとしても無駄よ。私、吹っ飛ばされたんだから」

こ、こいつ・・・俺が能力発動したのを知られたくないのを知っているな！

「・・・トキさん。本当ですか？」

「え〜っと、ん〜」

「本当よね？」

エリサは食事中にも関わらず小剣を抜いて、俺を睨みつける。瞬間、俺の皮膚から汗が噴出するのがわかった。

「嘘言うと・・・斬るわよ？」「はい、発動しました」

・・・俺、弱すぎる・・・。

「まあ！発動したんですか！これで能力の特訓も開始できますね！予定より早かったので驚きです！」

アリサは自分の事のように喜んでくれた。・・・自分としてはあまり嬉しくないな・・・どうやってか逃げられないか・・・あつ！

「アリサ、そういえば、この村に能力者って居るの？」

俺は実際、この村に来て能力者を見たことがない。

「あ、はい。居ますよ。訓練は離れたところでやってるんです」

「あ、そうなんだ・・・」

がつくりと肩を落とす。ああ、俺はこれからどんどん体を虐められるのか・・・俺に能力のいろはを教えてくれる人、できれば優しい人だったらいいなあ、なんて願うほど、俺の今の状況は切実だ。実際、今、エリサと筋肉モリモリの人に訓練されているが、きつい。俺の体の調子なんてお構いなしの訓練だ。・・・いや、あれは一種の拷問だな、うん。

「そつだ、明日！さつそく【フレイヤ】さんの所に行きましょう」

「あ、明日?!」「はい」

うあ、即答されたよ。それになんだよ・・・明日って。

「で、でもさ、明日は普通の訓練もあるよ?」

「それは今日でおしまいです。明日からは全てフレイヤさんの所で訓練になると思います。がんばってくださいね」

満面の笑みで俺を励ますアリサ。・・・そんな顔されたら断れないじゃないかつ。

「うん・・・がんばってくるよ」

俺は落とした食器を片して「ごちそうさま」と言って自室に戻った。

。そういえば、【フレイヤ】って北欧神話に出てくる人だよな・・・ま、偶然かな?

俺は自室に戻って布団に倒れこむと、そんな疑問が浮かんた。

「ま、考えてても仕方が無いか」

そんな事を呟きながら睡魔に襲われた。今日はいろいろ有ったしな・・・。今日も睡魔に逆らわないで寝よう・・・。明日の事は明日考えるか。

明日への不安（後書き）

何か感想貰えると嬉しいです。

三十路の女

今、俺は【かなり】危険な任務を任されている。真面目にやらなければぶっ殺されるらしい。難易度としては高くはない。だけど・

「なんで掃除なんですか？」

訓練じゃなくて？

今から少し前の事

「はい、あと少しです。がんばりましょう」

現在、俺とアリサは山道を歩行中である。武器やら食料を俺一人で背負っているのかきつい。でも、アリサ曰これも訓練らしい。ま、確かに筋力向上は望めるだろうけど・・・。

「も、目的地に着くまでに俺の体力がなくなっちゃうよ」

と、弱音も吐いてみるが、

「大丈夫ですよ。1分ぐらいなら休憩もらえられますから」

おいおい、「そんだけかよっ」て突っ込みを入れそうになってしまったじゃないか・・・。

「だ、大分キツイ人なんだね・・・。その【フレイヤ】って人は「どうでしょう？ただ、今までフレイヤさんの所に修行を志願した人は、皆逃げちゃったって聴きました。皆さん何か有ったのでしょうか？」

・・・結論から言うと、俺の今回の訓練・・・もとい、修行はかなりきついものになりそうだ。

少し歩くと小さな小屋が見えた。木でできた、綺麗なつくりの小

屋だ。

「はい。着きましたよ。此处がフレイヤさんのお家です」

俺はやつと着いたのか・・・と額の汗を拭う。と、その時

「ふん、このくらいで体力が尽きるとは情けない・・・。今度の私の弟子はこんな貧弱な男なのか？」

後ろで女性の声がしたので振り返る。そこには、三十路ぐらいの女の人が腰に手を当てて立っていた。

「こんにちは、フレイヤさん。この方がこの間お話したトキさんです」

「へえ、この貧弱小僧がねえ」

そう言つとフレイヤさんは俺を品定めするかのように、上から下まで見る。

「よ、よろしくお願いします」

俺は逃げ腰になりながらお辞儀をする。結構威圧感のある目だ。

「ふんつ。まあ、顔は悪くはないが戦闘は弱そうだな」

威圧感丸出しの目をさらに細くする。ぶっちゃけ怖え。

「でも、お話したと通り能力者です。昨日、能力が発動したらしいです」

「へえ、それはそれは。ま、能力者として強くすればまともなレベルかね」

「はい、ではよろしくお願いしますね。トキさんもがんばってください」

アリサはそれだけ言つと、俺にバックを渡してさつさと下山してしまつた。ちなみに、バックの中身はシャンプーや日常生活品だ。

「おし、さつそく訓練しようか」

「さ、早速ですか・・・」

「だから、訓練だよ」

「いや、訓練じゃないでしょ・・・」

俺はモツプを持った状態でため息をついた。以外や以外。この世界にもモツプはあるらしい。それも名前も同じだ。シャンプーなど、現実世界にある物が結構ある事に驚いた。ま、今はそんな事はどうでもいいとして・・・。

「これじゃあただのお手伝いさんじゃないですか」

「文句あるのかい？」

「ありまくりです」

お互い睨みあつたまま一步も引かない・・・けど、俺、足少し震えてる・・・。

「これは訓練だよ」

「じゃあどんな訓練なんですか？」

そこまで訓練と言うなら、どんな訓練か聞かせてもらおうじゃないか。そんな一言は言えないけどね。だつて怖いもん。

「これはオーラの操作性を高める訓練なんだよ」

「そんな事言われても、オーラの出し方わからないんですが・・・」

実際、発動したにはしたのだろうがよくわからない状態だったし、俺は俺で眼帯を取られまいと必死だったのだ。いきなりオーラ発動！なんて言われても、今の俺には全然出し方がわからない。

「うーん。発動はしたんだろ？」

「発動はしたにはしたのですが・・・」

俺達二人は、はあゝとため息をついて肩を落とす。

「そうだな・・・まずはオーラを自由自在に出すやり方を訓練せねばならんな」

「どんな訓練をすれば良いんですか？」

俺の質問にフレイヤさんは腕を組んで「うーん」と唸り始めてしまった。俺自身はやる気はあまりないが、アリサの期待を裏切りたいくはない。面倒見てもらつてゐるわけだし。

フレイヤさんは少し唸った後、「俺に打たれてみる？」なんて言い始めた。実際、そんなんではオーラは出てくるようにならないら

しい。自由自在にオーラが操れる人なら、絶対量の増加に繋がるらしいが……。

「……その左目……」

「えっ？」

突然のフレイヤさんの言葉にドキツとした。左目の事は触れてはほしくなかったが、そうも行かないらしい。

「何で眼帯なんかしてあるんだい？アリサの話だと怪我じゃないらしいじゃないか」

「それは……」

「……その左目に何か隠してあるのかい？」

確信をついたフレイヤさんの言葉、全身の汗腺が開くのが分かる。額にも脂汗を掻き始めた。

「そのうるたえ方、やっぱり何かあるんだね。外しな」

「断ります。これは俺の問題なので拒否する権限はあります」

「いいから外しなっ！」

そう言うなりフレイヤさんは飛び掛つて来た。俺はそれを防ぐために両手を前に出す。しかし、飛び掛つて来たはずのフレイヤさんは両手に当たらず、壁の方へ吹っ飛んでしまった。

「ちっ！」

以外に中は広い小屋の中で吹っ飛んだフレイヤさんは壁に受身を取る。かなり手馴れた動きだった。

「やっぱり、その左目に能力の秘密が隠されているね」

「え？」

確かに、俺の左目は異常な色だが現実世界では今まで不思議な事は起こっていない。

「普通、一度能力が発動するとオーラを操れるようになるんだよ。

それは、例えオーラの使い方を分からなくてもね」

「どうしてオーラの使い方が分からないのにオーラを操れるようになるんですか？」

矛盾してる気がする。オーラが操れるって事はオーラの使い方を

知ってるって事じゃないのか？そんな俺の疑問に対して、答えは簡単だった。

「オーラの使い方が分からなくても、能力自体は使える。つまり、自分が空を飛んだならもう一度飛びたいと思えばいい。今回、オーラの使い方が分からないお前が、二度目の能力を発動させて私が吹っ飛ばされた。つまり、前回発動した状況は、今回のように左目に関わる事だったって事だな」

一回の能力発動でそこまで見破られてしまった。登山の時、アリスが「フレイヤさんは凄い人ですよ」ってた意味が理解できた。頭が良い。多分戦闘でも頭の働きの良いのだろう。とつさの判断力に長けていそうだ。

「ま、その左目がどんなになってようと私は気にしない。お前はその左目を変に思われるのが嫌だから見せたくないのだろう？」

「っ」

「またもや確信をつかれた。さすがフレイヤさんと言ったところか。」

「・・・はい」

「でもね、私はさっき言った通り気にしない。それに、お前さんが眼帯を外さない事には訓練の組み立てもできないよ」

フレイヤさんは腕を組んで俺を見据える。

「・・・じゃあ、取ります」

どんな目でも気にしないって言うてくれたんだ。それは嘘じゃないだろう。俺はフレイヤさんの言葉を信じて眼帯を外した。

過去の現実世界（１）

俺は意を決して眼帯を外した。・・・そういえば現実世界で眼帯を外した時、いや、外されたとき、高校でひどい目にあっただな・・・。

過去 現実世界

「おい、その左目はどうしたんだ？」

俺は入学式を終えて初めて、高校の教室に入った。そこで担任に声をいきなり掛けられてしまった。それも、一番触れてほしくない事にだ。現在俺の左目には眼帯がしてある。・・・目が赤いのを隠すためだ。

「あ、いえ、これは・・・」

言葉に詰まる。此处で「目が赤いんです」なんて言って眼帯を外したら小中の二の舞だ。それだけは避けたい。なんとしても避けたい。

「怪我か病気か？」

「あ、はい・・・」

あまりつきたくはない嘘だが仕方があるまい。病気と言うのは嘘ではないかもしれない。俺の両親は二人とも純粋な日本人だ。それなにも関わらず俺の左目だけ赤い。生まれた時からだ。病院でも原因不明。色素が元から赤い、と言われた。

だが、俺はそれだけではないと思う。これは両親にも言っていない事だが、俺の左目は物が透けて見えるようになる。透かしと見ようとすれば、透けて見える。だが、これはありえない。

しかし、実際にありえている。眼帯をしている今でもはっきり見える。右目は普通に物が透けて見えないのに、左目だけ透けて見え

るのはいない。人を透かして見ることもできる。女子の制服を透かして見るなんて事もできる。・・・そんな事はやらないぞ。いや、マジで。基本的に俺は真面目だからな。うん

入学式が終わって、少しだけのHRも終わり俺は帰宅の路へついた。入学式の日なんてもんはそんなものだろう。

ちなみに、俺はこの学校に同じ中学だった奴は一人しか居ない。そんな学校を選んだのは、左目の事をいろいろ言われたくないからだ。唯一、同じ学校の奴も女子で、おとなしくて人と関わりを持とうとしなかった奴なので心配要らない。・・・もしかしたら、いつか言ってしまうかもしれないけど・・・。

「杵島君・・・」

後ろから突然声をかけられビクツとしながら振り返った。

「えっと・・・どちらさま？」

どつかで見たことある気がする女の子。髪はセミロングで少し茶色っぽい。染めた色じゃない事は確かだな。つまり地毛。それでもって顔は結構俺好みで、可愛い子だ。

「あ、私、藤代 彩です」

「そうですか。えっとそれで、なんで俺の名前を？」

「私杵島君の席、近いんですよ。それに、今日最寄の駅で杵島君を見かけたので、折角だから一緒に帰らないかなあ」と・・・」

えっとつまり、彼女、藤代さんは俺と一緒に帰りたいらしい。今まで生きてきて「一緒に帰ろう」なんて女子に言われたのは初めてだ。

「え？えっと、え」

言葉に詰まる、こんな経験ないから何て答えて良いのか分からない。別に一緒に帰りたいわけじゃない。が、頭がパニックになってしまっていた。

いやいや、彼女はたまたま同じ席で、たまたま帰る駅が同じで、たまたま名前を知った俺を、たまたま誘ってみただけなんだ。そうだ。そうに違いない！・・・自分で考えておいて悲しくなってきた・・・。

「あの・・・やっぱり迷惑かな？」「全然！」

即答しちゃいましたよ。少し俯いて上目使いで頼まれたら断れません・・・。ま、もとより断る気なんてなかったんだけどね。

俺がOKを出した事で二人並んで一緒に歩く。歩く。歩く。歩く。・

ま、そんなこんなで今俺はピンチです。誰か・・・誰か・・・

俺に話題をくれ。

そ、ま、話題がないんだよね。二人並んで帰るだけ。重たい空気と言うか、なんか沈黙が苦しいと言うか・・・。藤代は俯いた感じで歩いて話しかけてくれる雰囲気も、話しかけられる雰囲気でもないし、それ以前に話題がない。

「あ、あのさ」

「は、はい」

とりあえず沈黙を破ろうと声を発したが、先ほど言った通り話題がない。

「えーと、なんだ、その」

「・・・」

「ご、ご趣味は・・・？」

なんだその質問。お見合いか？・・・うあ、自分で言ってる顔が熱くなってきた。

「しゅ、趣味ですか？・・・そうですね・・・料理を作る事、かな」

「そうなんだ・・・」

会話終了

藤代が折角答えてくれたのにそれから話題を広げる事ができなかった。

俺に対する質問もなく、お互いの家の分岐点に着いてしまった。

「あ、あの、私こっちだから・・・」

「そつか。じゃあ、またね」

「うん、また、明日・・・」

俺の帰路の逆の方向に歩いていく藤代を見送りながら、俺も家に向けて歩き出した。

「ふう〜」

家に着いてそうそうため息を吐く。

「多分、明日は一緒に帰ってくれないだろうなあ」

折角高校に入って心機一転したのになあ・・・。そんな事を考えながらも今日の晩飯の献立を考えてしまう俺だった。

翌日

「終わった・・・」

教室内で独り言。二日目からいきなり授業。さすが高校。高校になつて、同じ中学の人が居ない人は、友達のクラスに行つてしまつたりするので、高校生二日目はとても静かなものだった。

でも、今日の朝、藤代が挨拶して来たことはうれしかった。俺の高校生活の滑り出しは順調だ。やっぱり、左目は隠してた方が全然いいな。俺は高校生活を有意義に過ごすための誓いを、心の中でそ

つと
眩
いた。

過去の現実世界（1）（後書き）

感想、お待ちしておりますm——m

過去の現実世界（2）

来ては欲しくなかった日……今日は俺の命日になるかも知れない日……。それは……

【健康診断&身体測定】

死んだ俺……。

4月の終わりごろになるとある程度皆会話するようになる。俺も、仲の良い友達や、仲の良い異性の友達もできた。中学時代の俺では考えられない事だ。

「では、今日の帰りのHRを終わりにする。委員長。号令掛けて」今日の帰りのHRも終わり、帰る準備を終わらす。藤代の方を見てアイコンタクトで『一緒に帰ろう』と告げる。藤代もそれを感じたのか、コクリと頷いた。もはや、俺達は普通に会話できるようになっていた。……それ以上かも。

あ、ちなみに、委員長と言うのは『クラス』委員長の事である。

「起立！れ……」

「あ、ちよつと待った」

担任の原が委員長の号令を止める。早く帰りたい連中は「なんだよ……」と悪態をついていた。が、担任は気にしてる素振りすら見せない。教師たるもの、この程度気にしていたらやってられないだろう。

「言い忘れていたが、明日は健康診断と身体測定を一気にやるからな。体操着を忘れないように。以上」

俺は一人でいきなり肩を落とす。後ろの人と両隣の人が「なんだ？」みたいな目で見た来たが気にしない。

「礼！」

皆、礼をして教室をでる。部活へ行く連中や、放課後にどこかの店によっていく者。皆、それぞれの行くべき場所へ向かう。そう・・・俺を残して・・・・・。

「杵島君？帰らないの？」

「・・・ん？ああ・・・帰るよ・・・・・」

俺は肩を愕然と落としながら教室をでる。後ろでは藤代が何かぼやいていたが、今の俺の耳には入らなかった。

「ねえ、何かあったの？」

マイナスオーラ全快の俺は藤代を心配させてしまっているらしい。「ああ。あったよ。いや、厳密に言つと、ある、かな・・・」

俺の言葉にキョトンとして首を傾げる藤代。こういう可愛い仕草が男達の目を奪うのだ。俺も何度奪われているか・・・が、今の俺の眼中に入りはしない。明日の事でイッパイイッパイだ。

「ねえ、私、力になれるかもしれないよ？話してみない？」

優しく、歩きながら俺の手を掴んで真面目な顔の藤代。俺は歩くのをやめて藤代を見る。

「ん、大丈夫だよ。明日中には解決するからさ」

いや、マジで明日中には解決する。いろんな意味で終焉を迎える。「そっか、わかった」

そついうと藤代は俺の手を離す。今更ながら、手を繋いでいたという事に気がついた俺は、顔の温度が急上昇するのを感じながら藤代を見た。藤代は藤代で自分の行為に赤面しながら、俯いていた。

翌日

「オス、朱鷺」

今、俺に挨拶してきたのは、俺の前の席の加藤 健二。俺のこの学校の中で、同姓で一番仲のいいと俺は勝手に思っている友人であ

る。実際、名前で呼び合っているの、仲は良い。

「うえゝす」

中学校時代では考えられなかった俺の挨拶の仕方。人というのは変われば変わるものと、認識させられた。

「どうした？今日の挨拶は、やけに気合入ってないじゃないか。何か悩み事か？」

「それがね、今日の身体測定と健康診断の事なんだけど・・・」

俺はそこまで言っただけでハッとした。この先を言えば、俺が何の事で落ち込んでいるのが、バツリ分かってしまう。「左目が赤いからさあ。どうにかして隠したいんだよね」なんて言ってしまうと、半月で出来た友情はおそらく、脆くも崩れてしまうだろう。・・・ここは何とかして誤魔化さなければ！

「あゝえつとあゝ、ほら！俺って身長高くないじゃん！」

「いや、高くないじゃんって力説されても・・・」

「だから身長計らえるの嫌いでさ！」

俺は自分のコンプレックスの一つを挙げて、何とか誤魔化す。

ちなみに身長は、162cmだ。・・・小さいな・・・。

「あ、なるほどね。ま、俺は目標である身長まで達してるだろうし、ま、恨むんなら牛乳を飲むことによって、身長が伸びない事を恨むんだね」

俺に対して嫌味を言っているようだが気にしない。気にしないように努めたら、俺の右に出るものは居ないだろう・・・。ま、そんな事はどうでもいいのだが・・・。

なんとか話を逸らせた俺は加藤の雑談とサッカー部の愚痴を聞いていた。すると、

「おはよう、杵島君。加藤君」

藤代の微笑ながらの朝の挨拶。俺はこれに癒されるんだ・・・。目の前にも同じような事を考えていそうな加藤は、藤代を惚けながら見つめていた。

「やっぱい・・・雑談してて思考を停止させてた・・・」

俺は加藤に助けを求めた。ここまできたら一人の力じゃどうしようもできないだろう。

「なんだよ。そんなに嫌なら仮病でも使って学校来なきゃよかったじゃん」

「そうか、そうすればよかったんだ・・・。なんで気がつかなかったんだ・・・。」

「お前って頭良いけど、たまに抜けてるよな・・・。んじゃ、今から仮病かませば？」

こいつ・・・他人事だと思って・・・。

「そういう訳には行かないよ。だいたい、仮病を演じるなんて言われても、仮病使った事ないからなあ・・・。家だったら電話で声を少し変えるだけで済んだのに・・・。」

「うーん。身長くらいそんなに気にするほどじゃないと思うんだがなあ」

ハア、とため息を付いて俺は横目で見る加藤。

「ま、まあ、人にはいろいろあるんだよ」

加藤はこれ以上付き合いきれませんが、といった感じで前に向きなおした。

「おし、まず、健康診断からはじめるからな。出席番号順に廊下に並べ」

担任が教室に入ってきた時の一言。それは、俺にとって死刑宣告と同じ事だった・・・。

過去の現実世界（3）

人生には幾度となくピンチが訪れるという。

確かにそうだと思う。実際、今ピンチの真っ最中。

MISSION 1 健康診断を乗り切れ

「次、杵島君。どうぞ」

健康診断が始まっていた。俺は自分の苗字が『き』で始まる事を呪った。だって呼ばれるのが早いじゃないか！俺はどうやれば左目の眼帯を取らないで済むのか、頭を抱えていた。

「杵島君。早くしなさい。後にまだ沢山人が居るんだ」

そういうと医者らしきおじさんは俺の後ろを指差した。俺は後ろを振り返ると、「さっさとしろよ」なんて目で俺を見てくる、クラスメイト達。俺は渋々医者のおじさんの前の椅子に腰掛けた。

「んじゃあ、目の検査なんだけど・・・左目はどうかしたのかい？」
来た！。いきなりの試練。がんばれ俺。此処で負けたら末代までの恥だ！

「えつとですね。実はですね。少し切っちゃって・・・」

「ほう、それは大変だね。見せてみて？」

おじさんは俺の眼帯を取ろうとする。

「いえ、俺、主治医が居るので左目は大丈夫です。右目だけ検査してください」

「うーん。そういう事言われてもねえ」

確かに難しいかも知れない。やっぱりここは俺の巧みな話術で・・・。

「まあ、主治医が居るなら問題ないか。できれば診断書持ってきて欲しかったけど・・・」

「え？今なにか言いました？」

なんかボソボソ言ってるでよく聞こえなかった。

「いや？何も言ってるないよ。・・・よし、右目も問題ないし、もういいよ」

・・・以外にアツサリ終わってしまった。

以降の健康診断は問題なかった。なんだか知らないレントゲンを撮られたりしたが、別に問題はない。

俺は一つの難関をクリアして内心、ホッとしていた。だが次は身体測定の見力測定。これが問題だ。ま、同じような手を使えば難なくクリアーできそうだ。

MISSION 2 最後の攻防で勝利せよ

何だか文字数も少なく、たいした修羅場もなく、つまらなく進んでいるが気にしない。

んで、俺は今保険の先生の前に居る。この最後の攻防を勝利すれば俺の高校生活は約束されたも同然だ。

「ってな理由ですね、眼帯を外すことは許可されてないんですよ」

「そっか。診断書かなにか持つてきてるかな？」

そっか、診断書なるものが必要なのか。そりゃあ生徒の言葉なんていちいち信用してらんないのかもしれない。

「いえ、今日は忘れちゃったんですよ・・・」

「そっか・・・じゃあ右目の視力だけ測定してね」
「はい」

俺はまたまた大した事もなく事を終える。なんだかつまらない気もするし、期待はずれな気がするが、俺はこれで大満足だ。

視力の測定も終わり俺は安堵のため息を吐きながら教室に向かっ

た。

「おい」

前から歩いてくる見覚えのある人影。・・・加藤か。

「どうしたの？」

「ん？後ろから足音が聞こえたんでね。で、どうだった？身長」

「ああ、やっぱりあんまり変わってなかったよ。もう俺の成長期は終わりだね」

俺と加藤は今日の身体測定の保険の先生はどうとかの話で盛り上がりながら教室に戻った。そういう話はやっぱり盛り上がるんだよな・・・。

「杵島」

教室に着いた俺は、後ろから不意に呼ばれて振り返った。

「何？」

そこに居たのはクラスメイト。あんまり話したことはない。確か苗字は和田だったかな？

「それがさ妙な噂が立ってるんだよね」

「妙な噂？」

「そうそう。お前の左目の噂だよ」

俺はその言葉を聴いてドキツとした。やけに鼓動が早くなり、心臓の音が大きくなり、周りの音を遮断する。

いったいどうしてそんな噂が流れているのか・・・考えられるのはただ一つ。あの、中学で同じだった女が言ったのだろう。そんな事をペラペラ言うような奴だとは思っていなかったが、仲のいい友達に言ってしまったて、それから広まったのかもしれないし、この際理由はどうでもいい。もう、煙は上がってしまったているのだから・・・。

「左目の噂って・・・何？」

「それがさ、瞳孔の周りだけ赤くて、他は普通だって聴くじゃないか。で、本当の所はどうなんだよ？」

面白半分、からかい半分で俺を見る和田（多分）。こういう奴に噂が回ったのは痛い。

「そんなわけ、ないじゃないか」

「でもさ、お前いつも眼帯してるだろ？ 実際なんじゃないかって、皆言ってるぜ？」

「だからさ・・・そんなただの噂だよ」

「火の無い所に煙は立たないよ。お前の眼帯と、お前の中学の同級生って奴が証拠だよ」

和田はニヤリと気持ちの悪い笑いを浮かべる。こういう奴はクラスの中で誰かをイジメたり、誰かの悪口を言っていなきゃ気がすまない奴なのだろう。俺が最も嫌いな人種だ。

「だからさ・・・」

「いいから外せつて！」

和田は俺に飛び掛つて来たが、俺はそれを避ける事が出来ずに一緒に倒れてしまう。

「おい、何やってんだよ」

頭の上で誰だかわからないがクラスメイトの声がする。・・・そうだ！ 助けを求めよう！

「あの、たすけ・・・」

「お前もこいつの眼帯を取るの手伝えよ！」

和田はマウントポジションのお状態で、俺より早く誰だか分からないクラスメイトに命令をする。

「いいね、手伝うよ」

「なっ！」

それからは最悪だった。話したくないくらい最悪だった。俺のひ弱な腕じゃ対抗で出来ずに、楽々と眼帯を取られてしまった。

その上、それから加藤と藤代にその場面で二人が教室に用事から帰ってきてしまったので、俺の高校生活は終わりを告げた。

その日から加藤は俺から離れるようになった。俺から席を離し、俺を見る眼がまるで、汚いものや化け物を見るような感じだ。話しかけても無視。クラス全体がそんな感じで、高校生活は一日にして中学と同じ状態になってしまった。そんなクラスメイトは俺の眼を【呪いの眼】（のろいのまなこ）と名付けた。

だが、藤代だけは違った。俺にいつも同じように話を掛けてくれて、周りから何を言われても俺のそばに居てくれた。眼の事には触れない、いつも同じように笑っていてくれた。

「なあ藤代」

「ん？どうかした」

俺達はいつものように一緒に帰っていた。もう太陽は沈みかけて、町全体を綺麗な色で覆っているような時間だった。

「ごんな。俺のせいで藤代まで陰口言われるようになったちゃって・

・」

「い、いいよ。全然。私気にしてないから！」

ニコツとする藤代。でも今は、その微笑がチクリと胸を刺す。

「・・・無理しないでいいよ・・・。俺なんかと一緒に居なくても大丈夫だよ」

俺は無理をしたように微笑む。これ以上、藤代に迷惑を掛けられない。

「無理なんかっ！私朱鷺君の事がっ・・・！」

そこまで言うとうと藤代は顔を真っ赤にして自分の家の方へ走って行ってしまった。

「・・・俺の事がなんなんだ？」

俺はなんでそこで顔を真っ赤にしたのか分からずに首を傾げていた。それに、いきなり走られたので追いかけることすらできなかった。

た。とりあえず、明日聞いてみよう。うん、そうしよう。

過去の現実世界（3）（後書き）

ごめんなさい。今回期待はずれだったのかもしれませんが。しかも公開が遅れて申し訳ございません。これからもう少し早く公開できるよう、がんばります—— あ、あと、小説を評価してくださった方々、ありがとうございますm—— m

思い出からの離脱

「おい？」

昔、現実世界での思い出を思い出してるとき突如、フレイヤさんに声を掛けられた。

「どうした？いきなり黙って」

どうやら俺は思い出の深い所まで行ってしまったらしい。

「いえ・・・大丈夫です・・・」

「そうか。なら外してもらえるか？」

俺は頷いてまた、眼帯に手をかける。

やっぱり昔の事を思い出すとつらいな・・・。

俺は静かに眼帯を外した。

「うーん。それにしてもその左目の事・・・何かの書物で読んだ覚えがあるような・・・」

これが俺の左目を見たときのフレイヤさんの、第一声である。

「もしかして、『この左目を持つ者は勇者』とか？」

「確か逆だな。不吉がどうだらこうだら・・・」

まあ、なんとも曖昧である。

「ま、どっちにしてもその左目は、お前の能力と何か関係しているだろうな」

確かに俺もそう思う。物が透けて見ることの出来る左目だ。この世界で考えるならば、俺の能力者としての能力が関係しているっていいだろう。

「それで、これからどうすればいいんですか？」

「そうだね・・・。私が見るには、あんたのオーラの流れは左目に

集中しているね」

「オーラの流れですか？」

なにやらまた難しい説明を受けそうな雰囲気である。

「そう。普通有能力者ならば、体の中心からオーラが発せられている。でも、あんたの場合、左目がオーラの中心になっているようだね」

なるほど。やっぱり俺は普通の人と違う・・・更に、普通有能力者とも違うらしい。

「なら俺は希少価値の高い人間ですね」

「そうかもね。ま、私にとってはいい召使だけだね」

・・・どうやら俺は弟子ではなく、召使らしい・・・。

「じゃ、そういう事で。ちゃんと薪割りしとくんだよ」

「どういうわけですか」

いきなり庭に連れて来られた俺は、斧を渡されて薪割りをするように命じられた。

「なんで俺が薪割らなくちゃいけないんですか」

「私はね、あんたのそのヒョロツちい体と、全然しよっぱいオーラを育てられるようにお願いされてるんだ。薪割りも訓練の一つだよ」

まあ、確かに筋肉はつきそうだ。

「じゃあその間、フレイヤさんは何をしてるんですか？」

「私は村に下りて一杯やってくるよ」

・・・おい。

「んじゃ、サボらないでちゃんとやるんだよ」

フレイヤさんはそう言うと言いつつ山を降りて行った。

取り残された俺は、訓練と言われてしまったので薪を割る事に。もちろん、30分後に疲れ果ててしまったのは、言うまでも無い。

思い出からの離脱（後書き）

少しスランプ気味です。とりあえず、過去の話はいったん終了です。また、ある程度話が進んだら書こうと思います。きわどい所で終わってるので落胆した方も多いかもしれませんが・・・（苦笑）

準備

さてさて、明日、ここの山の家を離れて町に向かうらしい。
少し遠い距離らしいが、徒歩で行くらしい。これも訓練だ。

「んじゃ、さつさと山を降りて村に寄ってから、メトンに向かうよ」
「へえ、町の名前はメトンって言うんですか」
さすが異世界。名前も個性豊かである。

無事に山を降りて直ぐに村に着く。村とフレイヤさんが頂上に住む山は近いのだ。

「ほら、早くしな。たらたらやっているとこの村が出るのが夕方になっちゃうよ」

「そ、そんな事言ったって・・・フレイヤさん、山下りるの早すぎですよ・・・。」

そうなのだ、下り坂をかなりのスピードで駆け下りているうえに、休憩は一切なしなのにも関わらず、息一つ切らさないでいるのだ。もはや超人。

「あんた、今変な事考えただろ？」

・・・俺は時たま思う。フレイヤさんの能力はテレパシーだと。

村に着いた俺達は行きの食料やテントなどを買った。数日間、野宿になるらしい。

更に、俺のスピードに合わせて行く事になってしまうと、一週間ぐらいかかるらしい。

「あ、お二人とも、どちらに行かれるんですか？」

後ろから声を掛けられたので振り返る。そこにはアリサの姿。

「アリサか。実はメトンって町に行くんだ」

アリサは俺がフレイヤさん宅でお世話になっている間、よく差し入れなどを持ってきてくれる。

雑なフレイヤさんの飯ばかり食っていると、舌が麻痺しそうになるの
で、アリサの差し入れはかなりうれしい。・・・ちなみに俺の料理
は壊滅的だ。

で、俺とフレイヤさん二人で行くと思っていたのだが・・・

「さて、出発よ。出発」

「楽しみですね。メトン」

てな感じで二人ほど増えてしまった。まず一人はアリサ。

アリサにメトンに行く話しをしたら興味を持って「一緒に行きたい」
と言い出したので連れて行くことに。野宿時の飯の問題を解消して
くれるだろう。

もう一人はエリサ。こいつの場合は簡単だ。「アリサが行くなら

私も」・・・らしい。

「女性を三人も連れて旅とは・・・俺も罪な男になったもんだ・・・
・・・」

ふつ、俺って隠れたモテモテ君だったわけだ。

「死ぬ。それとも私が頭破壊してあげようか?」「ごめんなさい。

冗談です」

ちなみにエリサは、俺の苦手な人BEST3にランクIN中だ。

「でも、出発は明日だ。ついて来るならかまわないが、ちゃんと体
を休めておきなよ」

フレイヤさんは大人だなゝなんて思っていると、

「それじゃ、私は一杯やつてくるから。朱鷺。ちゃんと荷物を家に
運んで置くんぞぞ」

と、言い残しさつさと飲みに行ってしまった。・・・俺の苦労は
増えるわけだ。

「まったく、いまだによくフレイヤさんの性格つかめないよ・・・」
最近そのせいで抜け毛が増えてる気がするよ・・・。

「それじゃあ私の家来ませんか？後でフレイヤさんには伝えておくので」

「ん？本当？助かるよ。ありがとうアリサ」

「なんでこんな男を家に呼ぶのよ・・・」

後ろでエリサの嫌そうな声が聞こえるが無視だ。いちいち気にしていたはらちが明かない。

その夜俺達三人は明日の準備をしてさっさと寝た。明日がなんだか楽しみだ。

成果

「ほら、さつさと起きてよね。出発する予定の時間がずれるでしょ」
朝・・・女性の声で目が覚める。少し乱暴な言葉遣いだ、気にしない。おそらくエリサの声だろうが気にしない。それさえ気にしなればいい朝だ。

俺は眠い目を擦りながら起き上がる。

「よし、起きたわね。さつさと朝食食べて、出発するわよ」

どうやら昨日言っていたことは冗談ではないらしい。

「本当についてくる気なの？危ない事に巻き込まれる可能性が無いわけじゃないんだぞ？」

「何言ってるのよ。あんたより私の方が強いでしょうが」

「でも、それは前の話だろ。今、どっちが強いかわからない」

確かにそうだろう。俺とエリサが勝負したのは前だ。俺の能力が開花される前だ。

フレイヤさんの所に言ってから3週間。短期間だが俺は成長したと思われる。体力だって筋肉だってついた。フレイヤさんとの戦闘訓練で戦闘にも慣れてきた。なにより、能力を少しずつ使えるようになってきたのは大きい。

「そう。そこまで言うなら私と勝負してみる？」

「そんな時間ないわよ」

ドアを開けて入ってきたのはアリサだ。

「喧嘩しちゃだめだよ。それに支度しなきゃ。フレイヤさんに叱られても知らないよ？」

俺達にとってその言葉は効果絶大だ。なんたってフレイヤさんは強い。流れるような動き。現実世界で言う『太極拳』みたいなものと『合気道』の重なったような技を繰り出してくる。ま、俺には『太極拳』と『合気道』の違いがはつきりわかるわけではないが。

「わ、わかったわよ。朱鷺！さつさと準備して降りて来なさいよ」

エリサはアリサを連れて俺の部屋を出て行った。どうやら、エリサもフレイヤさんの技の餌食になった事があるらしいな。

俺は一人になった部屋の途中で、動きやすそうな服に着替え始めた。

「で、荷物は全部持ったのかい？」

フレイヤさんが村の出口で最終確認を行う。主に持っていくものは、食料、寝袋、テント、火が燃えるもの、だ。火自体をどうするのかはまだ秘密だ。

「はい。持ちました」

アリサは大きなリュックサックらしきバッグを掲げる。それを見た瞬間エリサの眼光が俺を捕らえる。

「ちよつと朱鷺」

「なんだよ」

「あの荷物、あんたが持ちなさいよ」

「ちよつと待て！俺はフレイヤさんから押し付けられた荷物で IPPAI パイッパイだ。持つならお前が持てよ」

歩くとビン同士がぶつかって鳴る音によく似ている荷物だ。それに、フレイヤさんから慎重に運ぶようにとの命令されている。

「何？あんた、アリサみたいな弱い女の子に、あんな大きな荷物持たせるつもりなの？」

「う．．．．．、それならさ、お前が持ってやれよ」

見たところまだまだ余裕ありそうな感じだ。

「嫌よ。私だって弱い女の子。あんたが持つべきよ」

「．．．．．もういいよ．．．。とりあえず、俺余裕ないから．．．」

エリサのぶつ飛んだ発言で俺は反論する気すら失せてしまった。俺はとりあえずその場を離れるために先に行ってしまったフレイヤさんと、アリサの後を追った。

「あ、ちよつと待ちなさいよ．．．ちよつと！」

俺は無視を決め込んでエリサの前を歩いた。

相手が飛び掛ってくる。限界まで引き付けて、最小限の動きで避ける。フレイヤさんとの訓練で回避は特に伸びた。

「ガルルルルルウ！」

ヒラリと避けた俺にまたもや飛び掛ってくる。そして、同じように避けるが、今度は剣を抜いて思いっきり斬りつける。避けながら攻撃をするなんて技も山で身につけた。

「ギャウッ」

斬りつけられたモンスターはその場に倒れこんでしまった。

「おおー。強くなったって言うてたのは本当みたいね」

「そりゃ、ね。基礎能力、特殊能力の向上だけじゃなくて、フレイヤさんとの戦闘訓練、それにモンスターとの戦闘訓練をちゃんと積んだんだ」

「ま、貧弱男としてはがんばったほうかもね」

「ほら、無駄口叩いてないで、さっさと行くぞ」

フレイヤさんはさも、倒して当たり前な口調で一人歩き出す。確かに、この程度の雑魚モンスターごとき倒せないなら、この3週間なにをやっていたんだって話だ。それより前に村の護衛としての訓練もしてきたしな。

「トキさん。強くなってくれて本当にうれしいです」

俺の隣を歩いていたアリサが満面の笑みで微笑みかけてくる。

「少しは強くなったかもね。でも、俺が弱い事には変わらないよ。これからがんばるから見ててね」

「はい！期待してますね」

女の子に期待してもらうのって悪くないね。

「ううはぎう？」

「足らんな・・・」

数十体の死体を眺めながら呟いた。

そう・・・いくら殺しても足りない・・・。。人間も魔族も・・・弱くて弱くて相手にならない。さすが『神々の瞳』の力だ。ただの能力者など、紙屑に等しい。

「我と同等の者・・・『神々の瞳』を持つものだけか」
「ならば探すか・・・。。『神々の瞳』を継ぐ者を・・・。」

「んー。テント暮らしはやっぱ辛いな・・・」

首がギシギシしてるし、腰も痛い。寝袋がなんだか硬い気がするし・・・。

「んー！あー！よく寝た！」

・・・どうやら俺の寝袋だけ固いらしい。おそらくフレイヤさんのイジメかいやがらせか、悪戯だろう。おそらく悪戯。

「ほら、さっさと片付けて支度しろ」

と、フレイヤさんとアリサは早く起きていたのだろう。もう既に準備が終わり今にも出発しそうな格好だった。

「そうだぞ、早く支度しろよ」

・・・なぜか今さっき起きたばかりのはずのエリサ、な、はずなのに既に支度も終わり、テントも畳んであった。

俺は急いで支度を済ませて出発した。

最近の俺の勘は的中することが多い。必ずしも的中というわけではないのだが、的中確立が高い。だが、今回はいい予感が全然しない。前では女性3名が俺に荷物を持たせて歩いている。

フレイヤさんは何も考えてなさそうで、ただ歩いている感じだ。

「フレイヤさん・・・」

俺は意を決してフレイヤさんに尋ねる事にした。

「何だか道に迷ってませんか？」

「何を言ってるんだ？迷ってるはずないだろう？」

「・・・ここって地図見なくても歩けるほど、通いなれてるんですか？」

俺はフレイヤさんの手に地図がないこと、方位磁石もなにも持っていないことを不安に思っていた。

「まさか。ここを通るのは3回目くらいだな」

「・・・ならここがどこだか分かりますか？」「分からん」

「・・・ちなみに、今、俺達の居る場所は山の中。道も何も無い所。つまり、おそらくは、樹海・・・」

「よし、とりあえず、川を探そう」

山の中を迷っていることが発覚してから数分。フレイヤさんが原因にも関わらず、又先頭にたとうとしていた。

「フレイヤさん・・・」

「ん？なんだいアリサ」

アリサは俺に近寄りバッグの中身を開けて、食料を取り出す。

「あんまり迷ってる時間はありませんよ。食料のなくなりが思ったより少ないです。今日から二食にして、長期戦に備えたほうがいいと思います」

アリサの提案に対してエリサも同意する。

「うむ、ま、仕方がないか。酒のつまみが減るのはつまらんなあ・・・」

誰のせいだ！と叫びたくなるのを寸前で堪える。あんまり暴言を吐くと殺されてしまうので要注意だ。

「あ、そうだ。この山魔獣やらなんやら出てくると思っけど、私達3人は対応しないから」

「へえ？」

「だから、トキ1人でどうにかしろ」

・・・つまり、これも訓練って事らしい。町に着くのは何時になることやら・・・。

メトンでの目的

なかなか魔獣の癖に頭のいいやつだ。俺と実力は同等だ。能力がある俺の方が少し有利って所だ。

「グルルルルルウ」

唸りながら少しずつ間合いを詰めてくる魔獣。目は紫色に光、俺の動きを的確に捉える。

「ガウツ」

飛び掛ってくる魔獣をヒラリと交わして剣を振り下ろす。・・・が、逆にヒラリと交わされてしまった。

「甘い！」

が、最近は能力の向上の伸びの良い俺だ。オーラで剣を包んでいた。それで剣に特殊能力が加わっていた。

剣が地面に当たった瞬間、剣と地面の間で爆発が起きる。ちなみに、振り下ろした方向のみに爆発する感じなので、俺にはノーダメージ。

「ギャウツ」

爆発を受けた魔獣は、血を垂らしながらグッタリと倒れこんでしまった。

「うむ、ま、能力もいい感じで使えるようになってきたな」

「ほ、本当ですか？・・・かなり疲れますけどね・・・」

そうなのだ。オーラを使って戦闘を行うとかなり疲れる。オーラを纏っているだけでも、攻撃力、防御力、移動速度、反射神経が上がるのが俺の能力の特徴。さらにはほかに特殊能力があるのだ。

「それにしても、お前の能力は便利だな。普通に能力を発動するだけで、身体機能がかなり上昇する。今の戦い、能力がなかったらお前、負けてたな」

「ははは、そうですね。元の身体機能が低いので、少し疲れも溜りやすいですし・・・」

現在遭難中なのに、こんな事で無駄な体力を使ってしまう俺・・・

。

「ま、もうすぐ町に着くから、それまで我慢しな」

「現在遭難中ですよ？どうして分かるんですか？」

「適当な事言つてるとも思えないし・・・」

「オーラを感じるんだ。人が沢山集まっている場所には特に感じる」

「へえー俺もそのうち分かるようになりますか？」

「さあ？これは私の能力に関係があるからな。お前まで感じるようになるかは、わからん」

つまり、フレイヤさんの能力の断片みたいなものなのだろう。

ちなみに言うと、俺はフレイヤさんがどんな能力を持っているのか知らない。

川を見つけて人が居ると思われる方向に歩き出す、フレイヤさんと愉快な仲間達。

人が沢山集まっているのを感じるなら、最初からその方向に向けて歩けばよかったのではないか？と思ったが飲み込む。

このメンバーと一緒に居て覚えた事は、『俺は一言多い』。つまり、攻撃の標的にされやすいという事だ。おかげで、言葉を飲み込むのは慣れた。これは、人間が生きる術を身に着けるのと同じことだろう。さすが俺。頭がいいからすぐ物事を把握できる。

「ほら、もう見えるだろ」

俺は自分の成長を褒め称えながらフレイヤさんの指差す方向を見た。

煙突から煙が上がり、離れたこの場所からでも人の声が聞こえるほど賑やかな町だ。

というか、長期戦に備えるため、食料の調節とかしたのに、その日に着いちゃったよ。

「ん？祭りでもやってるのか？」

俺はそんなに賑やかな町だと思っていなかったので少し拍子抜けしていた。

「さあ？見て確かめてくれば？」

相変わらず、俺にはトコトン冷たいエリサ。目線を合わせようともしない。

「ほら、トキさん、エリサ。早く行こうよ」

又もや俺とエリサを置いて先に進んでいるフレイヤさんとアリサを追いかけるように、先に進んだ。

この町『メトン』は武器の町らしい。飛び道具や短刀、短剣（ちなみに俺は短剣と短刀の違いが良く分からない）に普通の剣と長剣あらゆる武器の製造場と市場がある町だ。

「この町に来たのはいくつか理由があつてね」

「いくつかの理由とは？」

「一個一個の用事が済んでからだな。まず、一つ目がお前に合った武器探しだ。トキは長剣向きだと私は思うね」

今まで、あの名前も分からない筋肉のお兄さんから貰った重い剣で戦ってきた。実際、リーチの長さは長い方の武器で、その部分は使いやすかったが、少し重い気もしていた。

「それはありがたいんですが・・・」

「ん？どうしたんだ？」

「お金はどうすれば・・・」

弟子になったので、今までの飯などは食わせてもらってきたが、武器のお金まで出してもらって良いのだろうか？

「それは気にするな。あんたが使いやすい剣で訓練する。そして、その力で村を守る。私にとっても無益じゃないんだ。気にするな」

「ハハハ、じゃあお言葉に甘えさせていただきます」

俺とフレイヤさんはエリサ&アリサと別れて別行動。アリサはエリサの用事に付き合うらしい。

「んじゃ、私の友人がやっている工房に行こうかね」

「はい」

俺はフレイヤさんの友人がやっている工房に向かいながら、自分

の新しい剣をどんなになるのか、期待をしていた。

荷物持ち

さてさて、俺が使う長剣を作ってもらうために訪れた工場。

「ここがフレイヤさんの知り合いがやっている工場ですか？」

「ん、まあそうだね」

なんだか古臭いつくりだが、現在稼動中な所を見ると、今、武器製作中と言った所だろう。

「さ、さっさと仕事を頼みに行くぞ」

「はい」

俺達は扉を開けて中に入っていった。

「お、久しぶりじゃねえか」

中に居たのは、ゴツツイおじさんと、俺みたいな感じでヒョロっとした体つきの男が居た。

「久しぶりだね、ワンツ。今日は仕事を頼みに来たんだ」

「察しはついてるぜ。お前さんがここに来るって事は、何か仕事を頼んで来る時だからな」

そういうとワンツさんはタバコらしき物を吸いながらケラケラと笑った。

「んゝまあそうだね。今日の仕事はこいつに長剣を作ってやってほしいんだ」

そういうとフレイヤさんは俺を指差して、俺の腕を持ち上げる。

「こんな細い腕だ。出来るだけ軽量化、で長くて、ある程度硬いのがいいな」

「うゝむ、お前さんは難しい注文ばかりだな。ま、俺様なら出来ないこともないがな」

ワンツさんはそういうなり、弟子らしき男性を呼んでいた。

「おい、ルイ。この素材を倉庫からだして来てくれ」

「はい、了解です」

ルイさんはワンツさんから受け取った紙を手にも、奥の扉に向かっていった。俺が予想していたより、ひ弱な人じゃないらしい。……声がシブイし……

「金は物が出来てから払うよ」

「いつもどうりだな」

フレイヤさんはそれだけ言うと「行くよ」とさっさと外に出てしまった。

「あ、待つてくださいよ、フレイヤさん」

「それで、何個かある用事の一つは終わったわけですが、他は何なんでしょうか？」

あまり良い予感はない。フレイヤさんの事だから、「良い環境で修行」って事はないだろう。真面目な時は真面目な人だが、普段はグータラでめんどくさがりな人だ。それも酒好き。

「んー、ここ限定の酒を買うことだ」

……ビンゴである。完全に予感どうり。というか予想どうり。安易に予想できた俺が恨めしい。安易に予想できたと言うことは、それだけフレイヤさんを理解してきたということだ。

師弟関係を考えればそれはいい事かも知れない、が、酒好きグータラ師匠を理解できるということも、それはそれで微妙である。

「はぁ……じゃあ俺はどうすればいいんですか？買うのに付き合えと？」

「まさか、お前が居たんじゃうるさいからな。一人で行くに決まってるだろ。お前は私が買い物してる間、この金渡しといてやるから、どっかで暇でも潰してな」

そういうとフレイヤさんはなにやら金属の入った袋を投げ渡され、一人でさっさと先に行ってしまった。

「あ、フレイヤさん！集合場所！」

……って既に居ないフレイヤさん……。

「とりあえず、店でも見て回るか・・・」

暇なら暇つぶしをすればいいのだ。俺は近くにある店をただ眺めながら歩く事に決定した。

中には入らない。「これ買いな！」なんて進められたら、断れる勇氣がないからだ。

そんなんで、適当に流しながら見ていると・・・

「あ、トキ」

とエリサ発見。俺を見るなり嫌そうな眼と、嫌そうな声。・・・

そんなに嫌なら、声掛けなければいいのに・・・。

「やあ、アリサは？」

「別に？他の場所に居るわよ」

「別行動？」

「別に」

うあ、なんと簡潔な答え。それほど俺とは会話したくないのかよ・・・。

「あ、そ。んじゃ」

俺はこれ以上お互い不快な気分になる前に、その場を立ち去ることにする。のだが、

「待ちなさいよ、トキ」

と、呼び止められてしまう。

「何？」

「暇なんでしょ？」

「暇つぶしてるから、暇じゃない」

「暇なのね」

「・・・はい」

だめだ、やっぱり敵わない。もう少し粘れば勝てそうでもあるが、ここで無駄に体力を消費する必要はない。エリサが俺に何か用があるとすれば、労働だ。自分で動くのが面倒だからとかで、俺をパシリに使う可能性大だ。

「よし、なら私の買い物に付き合いなさい」

「え？デートの申し込み？」「そろそろ全身の血、抜いてみない？」

「・・・はい、荷物持ち、頑張らせていただきます」

「よろしい」

というやり取りの結果、俺はエリサの荷物持ちに決定。・・・安

息はないようだ・・・。

一人

「私、新しいネックレスが欲しいのよ」

「なんだ。荷物持ちって言うから重たいものを予想していたよ。

服とか、靴とか、そんなものを沢山買って持たされるのかと心配していたが、どうやらそうではないらしい。

「どれが私に似合うか見て欲しいのよ」

「ん？そんなの俺でいいの？アリサは？」

「アリサは宿で寝てるわ」

二人が別行動していた時、どうやら今日の宿を探していたらしい。
「ま、俺でいいならいいけど。でも、俺、そんなに見る眼ないよ？」

「なんとなくでいいのよ。私に似合ってるなーって思ったの言ってくればいいから」

「ま、そんなんでいいならいいけどさ」

荷物持ちって感じじゃないだけOKだ。

「ん？どう？」

ネックレスを付けて俺に見せてくるエリサ。・・・くっ、なかなか可愛いじゃないか。

思えば、エリサもなかなかいい顔立ちなのだ。普段、悪魔みたいに俺をいじめるので気にしてはいなかったが、こうやって二人で居ると改めて実感する。・・・周りの男の視線も痛い。

「ま、いいんじゃない？でも、俺はこっちのほうがいい気がするけどな」

「お、なかなかいいじゃない。ちょっと付けて」

そついうとエリサは、先ほどまで付けていたネックレスを外して、俺に新しいネックレスを付けるように頼んでくる。俺は初めて女性

にネックレスを付けてあげる事にドキドキしながらエリサに付けてあげた。

「お、やっぱり似合うじゃん」

俺がそういうとエリサは、鏡を見ながら笑った。

「うん。いいわね。・・・おし、じゃこれにしよう」

そういうとエリサは会計を済ませに行った。

「うーん。二人がそんな関係だったなんてねえ」

いきなり後ろで声がしたのでビックリして後ろに振り返ると、そこにはフレイヤさんが立っていた。

「いきなり後ろから声かけないで下さいよ。ビックリするじゃないですか」

「デレデレしてるからだよ」

「大体なんでこんなところに居るんですか。それに、『そんな関係』ってなんですか」

「そのままの意味なんだが・・・ま、邪魔者は消えるよ」

そういうと、フレイヤさんはエリサの後ろをスウツとすり抜けて、店の外に出て行ってしまった。

「なんだったんだ・・・。それも酒持ってたし」

あの人の行動はなぞだな。

「トキ！何してんのよ。早く行くわよ」

「あ、ああ」

「そういうえさ、エリサの用事ってなんだったんだよ」

アリサはエリサの用事に付き合うつて言っただけで、どこで何をしてくるとは聞いていなかったたので、少し興味を持った。

「宿を探してたのとは別なんだろ？」

「んーそれは内緒ね。別に言ってもいいんだけど、何だか言いたくないし」

「なんだよ。買い物に付き合つてやったんだからさ、いいじゃんか。」

それくらい」

そうなのだ。俺の貴重な時間をエリサのために使ってやったんだから、言ってもいいなら教えてもらいたいものだ。

「えゝなんかやだ。なので言いません」

エリサは俺の方に向き、舌をだして走って行ってしまった。

「おい！待てよ！」

追いかけてみるも、全然追いつかない。いくら俺が強くなったと言っても、エリサの足の速さに追いつくほどではない。エリサの足の速さは、フレイヤさんも一目置いているほどだ。

「ったく。……ってどこどこだ？」

エリサを無我夢中で追いかけていたので、現在地がどこだか分からなくなってしまった。地図もないし（地図があっても見方を知らない）。

この道を通った事はあるのだが、ここから行き先を全然覚えていない。俺は歩いている場所を気にしていないで歩いているタイプだ。あたりを見回して、もう一度どうやって来たのか、どうやれば皆に合えるのか考えてみる。

「……って、俺、宿の場所わかんねえよ……」

初めて来た町で、俺は、一人の夜を明かすことになりそうだ。

心

カラスの鳴く時間も終わり、月が綺麗に見える時間になって来た。こんな時間に外のベンチに座って目を瞑ると、心が静かになって来るな。

グウウウウウウ

「・・・腹減ったな・・・」

「ふうん。腹減ってんのか」

「そうなんだ・・・腹減ってんだ・・・」
「って！」

「君誰?!いつからそこに??」

三人ぐらい座れるベンチに座っている俺の隣に座っている少年。気配すら感じさせなかった・・・。やるな、少年。

「んー少し前くらいから・・・かな?ま、そんなこといいじゃん。それよりさ、腹減ってんだろ?なら、飯奢ってやるよ」

少年はニカツと笑い、立ち上がった。

「ほら、行くぞ。俺達若者にはのんびりしている時間などないのだ」
「なんてわけのわからない事を言いながら、一人先に歩いていってしまった。」

俺はというと・・・

「ま、待ってくれ!また迷うから!」

笑いながら歩く少年と、半べそで腹を鳴らしながら歩く青年という、奇妙な絵が出来上がった。しまった。

「・・・ここが君の家?」

閑静な住宅街・・・ではなく、子供が地べたで寝ているスラム街。それが少年の家らしい。

「ん?ま、驚くよね。スラム街に住む奴が飯奢ってやるって言って

るんだから」

少年はケラケラと笑うと、レンガで積み上げた家らしき物の中に入っていった。

「そんな事はないけど・・・」

少しばかり賑やかで、働く場所もあると思っていた町の端にこんな所があるなんて、少しばかりシヨックを隠せない。

「さ、早く中に入った入った。今日はパンなんだ」

俺は少年に進められるまま、少年の家の中に入った。

中は以外に広く、人が2人くらい寝られるスペースは十分有る。

「なかなか快適な所だな。レンガの扉で、入るときは退けて、閉める時はレンガを元の場所に置いて、外気の進入を防ぐ所なんてイイアイディアだと思うぞ」

「そうだろそうだろ」

少年は満足気に頷きながら、端に置いておいたパンを取り出した。

「ま、一個食えよ」

「でも、これは君のなんだろう？」

「そんなの気にすんなよ。世の中助け合いだろう？」

少年はニカツと笑うと俺にパンを差し出してきた。

「んじゃ、ありがたくいただくよ」

何だかこんな空気の中で食べるパンは、不思議とおいしかった。

「そういえばさ、名前なんていうの？」

パンを食べ終わり、2人で寝るところがって居るときにふと思った。まだ自己紹介すらしていないじゃん。

「俺の名前はシンラ。カツコイイだろ」

「ハハハ。そうだな。ちなみに俺はトキ」

「へえトキか。いい名前じゃん」

シンラはそういうとケラケラ笑った。シンラの笑い方は、なんだか自然で、自分も一緒に笑いたくなるような感じた。

「ん？」

笑い合っていた途中に悲鳴みたいなものが聞こえる。

「ん？どうしたんだ？」

俺の疑問の声に反応するシンラ。今・・・

「悲鳴らしき声が聞こえたんだけど・・・」

「悲鳴？」

そうなのだ。なんだか分からないけど、遠くもなく近くもない距離から悲鳴が聞こえた気がする。そのうえ、先ほどの悲鳴らしきものを聞いてから、心臓の心拍数が上がって来た。

「・・・行こう。距離は分からないけど、方角ならわかるから」

俺は立ち上がってドアとなっているレンガを退けた。

「え？ま、いつか」

シンラも立ち上がり一緒にレンガを退ける。

心臓が高鳴り、一秒でも早くその場所に行きたいと思う。

早く　　早く

俺はそこで、この世界で、『本当の自分を知ることになる』

激情

流れを感じる。ただ、流れを。

悲鳴と共に流れを感じる。ただ、感じる。

似ている。何に？・・・俺に。

流れが、似ている。ただ、俺に。

神

「おい、本当にこっちで合ってるのか？」

俺と共に走っているシンラは、走っているのにも関わらず息も切らさず俺に質問してくる。普通走りながら喋れば息が持たないか？つまり、シンラと一緒に走っている俺は、言葉で質問に答えるのではなく、頭を上下に振ることではしか反応を返せなかった。

修行して強くなったと、言ってみてもまだまだだ。今まで生きてきた中でダラダラしてた分を、一気に挽回できるほどではなかったという事だろう。

少しばかり走っていると前方に人影が見える。なにやら人影が何

かを掴んでいるように見えなくもない。

俺とシンラは走るのをやめ、その人影に向かって歩き出す。するとシンラは目を見開き立ち止まった。

「どうしたんだシンラ？早く行こう」

シンラの手を掴んで歩き出そうとする、が、シンラは頑としてそこを動かない。動こうとしない。

「どうしたんだよ？何かあるのか？」

俺の質問にシンラは答えようとしない。ただ、表情には少し変化が見られた。俺にはその顔が恐怖に歪んでいるように見える。

「下がるう……いや、逃げよう……」

シンラの顔には色濃く恐怖がにじみ出ていて、発する声は震えている。

「だから、どうしたんだって」

俺はシンラの肩を揺らしながらシンラの真正面に立つ。

「アレ……」

シンラは俺の後ろ、つまり、人影の方を指差す。

俺は人影の方に向きを変えて、目を凝らす。明かりが少なくて見にくい。人影がなんとなく男性に見えてきた所で俺は、目線を手に持っているものに移す。

それは 人の

首だった。

「っ！」

俺は声も出ず、男の方を向いたまま固まる。シンラが固まっていた理由が今ならよくわかる。こういつくらい所で暮らしてきたシン

うだ。暗いところでもよく見えるのだろう。

「ほう、我を殺しに来たのか？」

男は俺たちを見つけたのか、俺たちの方に振り返ってくる。その顔は笑っている。

危険だ

「おい！シンラ逃げるぞ！」

俺は放心状態から戻ってシンラの肩を揺らす。だがシンラは動かない。

「おいシンラ！」

徐々に近寄ってくる男を警戒しながらシンラの手を掴んで逃げようとする、が、

「どこへ行くこうとしてるんだ？」

手を掴んで、男に背を向けた瞬間、

男は、

俺の目の前に居た

「なっ！」

俺は飛び退き男と距離を取る。シンラの手を離したのは失敗だった。

シンラはゆっくりと振り返り、男の顔を見る。そして、視線は男が持っている首に向けられた。首は、髪が長く、どこかで見たことのあるような顔をしていた。

「ねえ・・・さん？」

シンラが発した言葉に俺は耳を疑った。姉さんだって？シンラの家族構成を聞いていなかったたので姉が居るのも驚きだが、

「お前がねえさん・・・を？」

視線を姉の首から、男の顔へと移動させる。微妙に斜めから見ると形になっているためによくは見えないが、その顔は恐怖から怒りへと変わっているようだ。

「ん？・・・ああ、この女の弟か」

鼻で笑うと男はシンラの姉の首を投げ捨てた。

「お前っ！」

完全に自分を押さえ込んでいたものが弾けたのだろう。シンラは男に飛び掛った。ってバカ！呑気に見てる暇はない！止めないと殺される！

「シンラ！」

飛び掛るシンラを止めようと走る。ただ今はシンラを助けたいと、そう思った。なのに・・・

「餓鬼が・・・」

男が腰から抜いた剣は、俺が駆け寄るシンラの左胸を

貫いた

「ふんっ」

シンラを貫いたまま、男はまた鼻で笑った。その光景の訳がわからなくて、それ以上見たくなくて。だけど、目が離せない。

左胸に剣を刺したまま剣を振り、シンラを俺のほうに飛ばしてきた。

「・・・シンラ」

わからなくて、ただ、わからなくて。逢って数時間だけど、いい奴だってハッキリ分かってて。太陽みたいに明るい奴だって分かってて。なのに、今は、俺の腕の中で血だらけで・・・死んでいる。「餓鬼の分際で我に飛び掛ってくるとは笑止。つまらない殺しをしてしまった」

男はそういうと、剣に付いた血を払い、腰の鞘にしまった。「つまらないって・・・なんだよ」

今、自分が何を考えているのかも分からなくて。ただ、体中の血が沸騰してる気がして。オーラが体中からあふれているのが分かる。「ほお、能力者か」

男が笑ったのなんかどうでもよくて。ただ、念のために持つておいた剣を抜く。男も俺に合わせて、鞘に入れた剣を抜く。

「なんで・・・シンラを・・・」

一歩一歩、地面を踏みつけるように歩く。ただ、男の方に向かって。

「なんで？飛び掛って来たからに決まっておろう」

「俺は・・・シンラを止めようと・・・止めようとしたのに！」

俺は抜いた剣で男に飛び掛る。男の剣に比べて俺の剣は大きい。

男はすばやく俺の攻撃を防ぐ。スラム街の暗い路地に、剣と剣がぶつかり合う音が響いた。

「ほう、強い攻撃だな。武器はよくないが、一撃が重いぞ。鈍いがな」

「黙れっ！」

また、男に剣を振り下ろすも剣で防がれる。

「いいオーラの色をしておる、が、遊びに付き合ってやる筋合いもない」

男は俺の剣を弾くと一気に間合いを詰めてくる。

「ちっ！」

俺は一瞬でそれを判断してバックステップをする。が、少し遅かったらしい。

男が振るう剣が俺の胸を少し斬る。傷を擦り具合を確かめる。

全然行ける。

とりあえず、眼帯が邪魔だ。先ほどの攻撃も、距離間があまり掴めなかった。眼帯に手を掛けてゆつくりと外す。そして、両目で男を睨む。

「っ！その瞳・・・『神々の瞳』か！」

「そんなの知らねえ！」

眼帯を投げ捨てて、また、男に飛び掛る。オーラの出も調子が上がってきてスピードがあがる。

「むっ！」

男はすかさず横にステップで避ける、が俺の剣は男の肩を少しだけ斬る事ができた。

「ほお、やるではないか。さすが、瞳を受け継ぐ者だな。そのうえ最高種とは」

微笑んでやがる。シンラの姉を殺して、シンラを殺したのに、笑ってやがる。

「お前はっ！」

能力発動中で最高速度と思われる動きで男の懐に潜り込む。

「俺が殺す！」

下から振り上げる形で斬りかかる。が、その瞬間、男は俺の背後に居た。

「甘いな」

男は高々と剣を天にかざし、俺に向かって振り下ろす。

「その眼！我が貰い受ける！」

無理だと直感した。男の剣は早くて、男自体も早い。俺の何倍も、何倍も。

「悪いね。そいつは無理だ」

声が聞こえた瞬間、俺は別の所に移動していた。男のなんメートルも後ろだ。それと、誰かに抱きかかえられている感覚。

「ふ、懐かしい顔だな。フレイヤ」

「できれば拝みたいくない顔だがね」

フレイヤさんは険しい顔のまま俺を下ろして、シンラとその姉の死体を観察する。

「この二人はトキの知り合いかい？」

「少年の方は俺に飯を食わせてくれたのに・・・」

そこまで言って男を睨みつける。不敵に笑っているその顔が気に食わない。

「こいつが！」

俺がまた斬りかかろうとする、が、俺の手の中からは剣が消えていた。

「バカ。感情に流されるな」

フレイヤさんの手の中には、さっきまで俺が握っていた剣が握られていた。

「止めないでください！こいつは俺が殺すんだ！」

俺がそういうとフレイヤさんは呆れた顔をして、

「バカ弟子が・・・」

ドス

首に受けた衝撃を最後に、俺は闇に堕ちた。

霧の男

力が欲しい

奴を倒す

力が欲しい

誰よりも

力が欲しい

何よりも

力が欲しい

俺が目を覚ますと、見知らぬ天井が見えた。首を動かそうとしても激痛によってミリ単位動かしても、物凄く痛む。

「　　っ」

とりあえず、周りの気配を探ってみるが、誰も居やしない。．．．
てか、ここどこだよ？何で俺の体はこんなになってるんだ？俺はと

りあえず自分が覚えてる中で、もつとも新しい記憶を呼び起こそうとする。

「……………」

やばい、思いだそうで思い出せない。一種の記憶障害か？俺が自分の記憶障害を危惧し始めたところで扉が開いた。

「あ、起きたんですね」

アリサは水の入った桶とタオルを持っていた。普通ならここで、現実世界なら洗面器とかになるだろうが、そこら辺はやっぱり古さを感じる。

「ああ、何かもつとも新しい記憶すら蘇らないし、それに首が凄く痛い」

「……………思い出さない方がいいこともありますよ」

？ということはアリサは何で俺がこんな事になっているのか知っているのか。

「ふうん。ま、ゆっくり思い出さ。じゃあさ、なんで俺の首は激痛が走って、それにここはどこ？」

その質問に対してもあまりいい顔をしないアリサ。

「……………とりあえず、今は体を休めてください。まだ万全じゃないはずですから」

「あ、おいっ！」

そういうと、アリサは俺が呼び止めたのを無視して、水の入った桶を置いて部屋の外に出てってしまった。

「うゝむ」

アリサが出て行った扉を見つめて行き詰る。明らかに何か隠した態度だったけど……………。

俺の首の激痛と何か関係あるのか？いや、関係ないわけないか。

「でも今は考えらんねえ」

なにしろ体を起こして首を少し動かすだけで激痛なのだ。そりゃあ集中力も続かん。

「はっ！」

少し回りが霞んで見える。ちよつとぼんやりしていた間に寝てしまったのか？

「やあ」

いきなりベットの脇で少し高い声が聞こえたのでそちらの方に首を向ける。首の痛みは大分取れたので首を動かすことができた。

「・・・誰だ？」

いきなり知らない奴が隣に立っているんだ。そりゃあ警戒ぐらいするだろう。

「ん〜ん？僕の名前はシン。よろしくね」

そついうと男は爽やかな表情をする。髪の色は水色で美青年といった感じだ。

「・・・どうして見ず知らずの奴が俺の隣に居るんだ？」

普通ならエリサやアリサ。そして、フレイヤさんが居るはずだろう。なのに俺の横には初めて見る男が一人。まだまだ警戒は解けない。

「ん〜ん？ああ、他の女性3名には少し眠ってもらってるよ。僕の能力でね」

「！お前、皆に何をした！」

俺がベットから飛び起きてシンと名乗る男の胸倉を掴む。

「ん〜ん。言っただはすだよ。少し寝てもらってるだけだつて」

俺に胸倉を掴まれてる状態でもシンは表情を崩さない。

「・・・」

胸倉を離してあたりを見回す。花瓶の置いてある台には鞘に入つた日本刀らしき刀がある。少し長めだ。・・・しかし、それより気になるのは周りが少しぼやけている・・・というか景色が薄く感じるのは気のせいだろうか？

「どうやら気が付いたみたいだね」

俺が目パチパチさせているのに気が付いたらしい。

「・・・なるほど。景色が薄く見えるのはお前のせいかな」

「その通りだよ。僕の能力は『霧を作る事』なんだ」

つまり、俺が景色が薄く見えると思っていたのはこいつの作り出す霧のせいだったわけか。

「そんな霧を作るだけで、何故3人を眠らせることができた？」

「ん〜ん。本当は教えたくないけど、君は・・・いいかな」

シンは少し微笑んだ。

「僕は確かに『霧を作る事』ができる能力者。でも、能力者は皆オラを身に纏う事である程度の身体能力上昇ができるんだ。ま、君の能力は『身体能力を格段に上昇する事ができる』能力らしいね。もちろん、それに比べれば微々たる上昇率だけだね」

・・・ちよつと待てよ。こいつ、いつの間に俺の能力を把握していたんだ？・・・俺の情報が漏れているのか？どこから？

「・・・じゃあお前は3人を肉弾戦で倒したのか？」

アリサに戦闘能力は無いが、エリサとフレイヤさんは違う。フレイヤさんに至っては能力者だ。どのような能力を持っていたのかは知らないが。

「ん〜ん？違うよ。僕は霧で眠らせたんだよ。つまり、僕は『人を眠らせる事ができる霧』を作り出したんだよ」

「っ！」

だとするとまずい。既に俺の周りには霧が充満している。

俺はとつさにオラを身に纏い息を止める。なんとなくだが、有毒ガスみたいな感じですねえ。どうにかなれと思つた。次に、俺は台上に置いてある刀を手取る。この刀はおそらくフレイヤさんが注文していた刀だろう。持ったときにしっくりくる感覚。普通の刀より長く、リーチがあるが、俺の腕力でも重くない。いい刀だ。
「ん〜ん？安心してよ。別に君を取って食おうとは思ってないよ。ただ・・・」

「ただ？」

「僕達の同士になつて欲しいんだ」

後ろで突然声がしたので振り返ろうとするが、首に衝撃が掛かった瞬間。何度目かわからない、意識が飛ぶ感覚を味わった。

霧の男（後書き）

かなりの間更新が遅れて申し訳ないです・数少ない楽しみに続きを待っていた方、申し訳ないです；

話がどんどん以外（？）な方向へ進んでいきます。これから、どんどん続きを書いていくのでよろしくお願いします。

蒼の男

「油断したっ！」

トキの部屋の前を見張っていたら若い男が現れて、それから眠ってしまっただらしい。

「なんて失態だよっ！まったく！」

襲撃は警戒していたが、まるで殺気、気配が感じられなかった。だからこそ、油断した。エリサとアリサも寝てしまっている。トキの部屋はもぬけの殻で、部屋の中には少し霧が残っていた。

「殺された？いや・・・連れ去られたのか？」

分らない。でも、血痕は残っていない。少なくとも、ここで殺された事はなさそうだ。

「それにしても・・・」

武器も無い。いちお反撃でもしたのか？やはり血痕が残っていないとなると反撃に失敗したと見て間違いないだろう。

『あいつ』の仲間か？いや・・・『あいつ』は単独で動く男だ。

他人と一緒に行動するのを嫌う男。ならあの若い男は？・・・わからない。

「ったく。面倒なことになってきたよ！」

太陽の光が俺のまぶたを刺激する。俺は目を閉じられなくなつて目を開ける。

「やあ、お目覚めかな？」

蒼い髪に薄く蒼い眼。確か・・・シンとか言ったか。

「ここはどこだ？・・・シン」

俺は周りを見渡す。治りかけた首が少し痛む。気絶する前に掛かった衝撃が原因だろう。俺はどうやら移動しているらしい。おそらく馬車。馬の走る音が外から聞こえる。

「僕はシンじゃなくてユキ。シンとは双子の兄弟だよ」

ユキはシンと同じ笑顔でいる。本当にそっくりだ。

「で、なんで俺は馬車なんかに乗ってるんだ？」

「ん〜ん？それは僕達の仲間になってもらうためだよ」

ユキの隣に居たシンが会話に参加してくる。ん〜。並べてみるとよく似ている。てか、シンがユキの隣に居るのにまったく気が付かなかったし。だけど、今の俺にはまったくそんな事はどうでもよかった。

「仲間？俺が？なんで？」

俺なんかを仲間にしてメリットがあるのだろうか？能力者ではあるが、たいした能力も使えない、まだまだ初心者のところがある。そんな俺を拉致して、仲間にしてどんな意味があるのだろうか。

「君は僕と同じ。『神々の瞳』を持つものだからね。『奴ら』の手に渡る前に僕達の仲間にしてしまおうって作戦」

ユキは俺の眼帯に手を掛けて俺の赤い眼を晒す。が、俺は眼帯を取られた事よりも、なんとも言い難い不快感を感じていた。『神々の瞳』最近誰かに言われた気がする。が、思い出せない……。思い出せそうで思い出せない事で苛立ちを感じる。

「その『神々の瞳』を持つのはユキだけなのか？シンにはないのか？」

「僕にはないよ。持ってるのは兄さん……。ユキだけさ」

シンがそういうとユキは、俺になにやら説明してくれるらしい。

「君はなにやらいろいろと知らないことが多いらしいね。ま、そこら辺は僕が説明しようかな」

「不本意だが、よろしく」

俺の言葉に笑みだけ返すと説明を始めた。

「まず、『神々の瞳』からね。まずこの眼は特殊なんだ。かなりね。僕達の他に『神々の瞳』を所有しているのは5人。合計7人。それも全員能力者なんだ」

「ってことはユキも能力者なのか」

コクツとわずくユキ。ま、その『神々の瞳』を所有する俺が能力者なら、ユキも能力者なのはあたりまえか。

「でね、眼に色があるんだ。『神々の瞳』が発動すると眼の色が変わる。君の場合、片方の眼が常に発動中になってるんだけどね。普通、『ある一定以上のオーラ』を使おうとすると発動するんだ。つまり、眼の色が変わる」

なるほど、俺はその特殊な眼を持つ人たちの中で、更に特殊なわけか。

「僕の持つ色は『水色』。僕の普通の時の眼は薄い蒼だけど、発動するともう少し濃くなるんだ。ま、色が変わったとは認識できるよ。でね、他の色は、赤蒼緑黄紫白の眼があるんだ」

「俺はその中で『赤色』なわけだ」

「そうなるね。でね、眼には共通点がある。身体能力の上昇。それも使いこなせば飛躍的にあがるんだ。で、もちろん眼ごとに特殊な能力もある。僕の場合は『空気中にある塵や水分を氷に変える事』ができるんだ」

なるほど、という事は俺にもなにか特殊な能力がついているのか。実は、俺もそこら辺は感じていた。俺は手をかざすだけで人を吹き飛ばしたことがある。身体能力の上昇だけでは不可能だ。

「他に確認できているので黄色。彼は電気を発生することができる。更に、普通の身体能力上昇に加えて、自分の電気で筋肉を刺激して、更に身体能力を上昇させる事ができるんだ。もちろん、敵に電撃で攻撃するときは、自分に当てる電気の比じゃない威力だけだね」

・・・なんか強そうだな。ユキより強そうだ。・・・って待てよ。「なんでそんな事を知っているんだ？俺の時もそうだが・・・」

「うん？その黄色の眼を持つ者は僕達の仲間だからだよ」

「じゃあ、ユキの所には今二人の眼が集まってることになるんだな」「君を入れて3人だけだね」

・・・俺はまだ仲間になるとは決めていない。いきなり連れ去った連中だ。色々な話を聞かせてくれたことには感謝するが、そう簡

単に仲間になれるもんじゃない。

「ま、悩むよね。いいよ、今は。とりあえず僕達のアジトに、ね」
そういうとユキはにっこり笑った。俺はその顔がやけに優しく見えた。

アジト

「ええ！」

私はその報告を聞いて驚いた。まさか私が寝ている間に・・・

「トキさんが連れ去られるなんて・・・」

「どうしよう・・・どうしよう・・・」

「あつたまくるうゝ！」

本当にどうしよう・・・となりでエリサが叫んでるし・・・。
なんか殺気？みたいなものを感じるし・・・。

「こうなったら追うのよ！あんな変な男に眠らされて、何もしない
まま終われるもんですか！」

「そ、そうだよね！このままやられっぱなしは駄目だよね。トキさ
んも助けなきゃいけないしね」

「駄目だ」

私達が二人でトキさんの後を追うことを決めたのですが、椅子に
座っているフレイヤさんが私達の計画を却下します。

「どうしてですか！フレイヤさんはトキさんの事を見捨てるつもり
ですか！？」

「行くのは私一人だ。あんた達は村に戻ってな」

私が大声で言ってもフレイヤさんは表情一つ変えません。

「・・・あの男に礼をしないと、気が晴れないんですよ。フレイヤ
さんが同行を拒否してもいいですよ。私達は後ろから引っ付いてま
すから」

エリサは立ち上がってフレイヤさんを見下ろします。フレイヤさ
んはそんなエリサの目をじっと見て、何かを考えてるようです。

「・・・はあ、仕方が無いねえ。二人をほっぽっとく訳にも行かな
いしね」

「じゃあ、フレイヤさんに付いて行っていていいんですね！？」

「どうせ後ろから付いてくるなら、変わらないからね」

こうして、私達はトキさんを連れ戻す旅に出ることになりました。なんだか不謹慎かもしれませんが、村を出る機会が少ない私はドキドキしてます。ちゃんとトキさんを見つけて、また、元の生活をします！

ガタガタと馬車が走りながら音を立てている。俺はというと、暴れないという条件付きで縄をはずしてもらった。なんだか体がギシギシするが……。てか、首がやばい痛い。こいつらに連れ去られる前から痛かったが、ユキに首に手刀を食らって、更に痛みがまとったのだ。

「……いつになったらお前らの言う、アジトに着くんか？」
起きてから時間が経つほど首の痛みが増すので、上を向いた状態で首を固定している。

「んゝそろそろ着くんじゃないかな？」
「ほう、なんだか答え方が曖昧だな」

普通、自分のアジトの場所とか完璧に覚えているものではないのだろうか？俺だったらそうするが……。

「んゝん？僕達のアジトは地下に建設されているから、場所自体は変わらないんだ。でも、もし敵に感ずかれても困るから周りの岩の位置などを変えてるんだ。だから自分達でも正確な位置は分からないんだ」

「それって思いっきり本末転倒だな……」
敵に感ずかれなくても、自分達でアジトの位置が分からないんじゃない、まるで意味無いじゃないか……。

「ところが、そうでもないんだよね」
「どういう事だ？」

「ま、着けば分かるよ」
ユキとシンは笑いながらはぐらかす。むう、なんだか気になってしまった。

「おし、到着だよ」

馬車が到着した場所。そこは、微妙に木が生えてて、少し大きい石が在ったりする。

「この下にアジトがあるのか？」

んゝ、どうも入り口らしきものが見当たらないんだよねゝ。

「場所間違えたとか？よくわからないんでしょ？」

「確かによく分からないけどね、この岩があるでしょ？この岩の近く入り口があるんだ」

おいおい、なんか頼りないぞ？大丈夫なのか？

「さてさて、周りにだれも居ないし、そろそろ『案内』してもらおうかね」

ユキがそういうと地面に手をつけて、オーラを出している。

・・・だが、なにも起きない。

「・・・場所、本当に合ってるのか？」

「んゝん？大丈夫。そろそろ来るよ」

シンが言い終わった瞬間、俺達の足元に黒いシミみたいなものが広がっていく。そして、そのシミは俺達を飲み込んでいった・・・。

「ね？着いたでしょ？」

「え？え？」

いきなり声が聞こえて反射的に閉じていた両目を開く。

「おお！」

「ようこそ、僕達のアジトへ」

ユキ達のアジト・・・そこは、一つの町が丸々地下に移動したような風景が目の前に広がっている。

「か、感動した・・・てか、どういう原理だ??？」

小さめだが、一つの町を丸々地下に移動させたなんて・・・。はっ！まさか！

「そ、俺の能力だ」

前方に茶色いコートの男が一人。なんだか怪しさ満点な雰囲気をかもちだしてる男だ。年は俺より上。20後半ぐらいといったところか。なんかヒゲ伸ばしてるし。

「やあ、『神々の子』。俺はバルドーだ。バドでいいぜ」

「あ、俺は・・・」

「トキだろ？話は聞いてるぜ。てか、今じゃこのアジト内ではお前の名前はそこら中で聞けるぜ」

「どうやら、俺はここでは時の人らしい。じゃあ、ちょっとしたスター？」

「よろしくな、『神々の子』」

「・・・なんだよ、その呼び方は。ま、いいや。ところで、この町、どうしたんだ？」

呼ばれ方なんてどうでもいい。とりあえず、今俺が興味のある事といえば、こいつらの組織？のアジトである町の事だ。

「この町はつい2年くらい前までは、この真上にあっただよ」

「それがどうしてこんな地下にあるんだ？」

バドは「その言葉を待ってました！」といいながらコートを脱ぎ捨てた。

「それは！俺の能力だ！」

「いや、それさっき聞いたし・・・」

「何っ!？」

バドは「しまった・・・」と呟きながらテンションが最低値まで落ちてしまった。てか、独り言多いな・・・おい。

「ま、まあいいや。ここに来る時に『黒いシミ』に覆われただろ？あれが俺の能力さ！」

『黒いシミ』・・・あ！なるほど。

「つまり、バドの作り出す『黒いシミ』に飲み込まれるとここに移動しちまうのか」

「んゝ。少し違うな。ほら、床をってみろよ」

バドの言うとおりに下を向くと、そこには奇妙な文様みたいなもの

が描かれていた。今、俺達の居る場所は、へんな遺跡の上だ。その遺跡の床にバドの黒いシミと思われるもので描かれている。

「正確に言くと、ここに移動するわけじゃなくて、この文様が書いてある場所に移動するんだ。この文様の効果は半径100m」

なるほど、だから岩が目印だったわけだ。この文様から100m以内の場所なら岩をどこに置いて、すぐにここに移動させられる事ができるのか。

「ん？でも、俺達が上に来たってどうして分かったんだ？」

「それはね、僕が地下にオーラを放っていたからだよ」

「そして、この地下の天井にも俺の文様が描かれている。相手のオーラが触れればどこに居るなんて、俺ならわかるのよ。な？俺って凄いだろ？」

おお！なんだかバドが輝いて見えるぞ！

「ん？でも、あんた達の組織って能力者だけじゃないんだろ？なら、能力者じゃない奴はどうするんだ？」

「ん？僕達は決して一人で外に出ることはない。出るとしてもそれは能力者だけ。非能力者達は地上に出るときは、グループを作って、その中に能力者を一名入れておくことが決まりなんだ。そうすればちゃんと帰ってこれるでしょ？」

なるほど、以外に考えているんだな、と感心してしまった。てか、便利な能力だな。

「ほお・・・ん？待てよ、『黒いシミ』で飲み込んだ物を、この文様の場所に移動させる事ができるんだよね？」

「おう？そうだぞ」

「じゃあさ、どうやって地下に文様を描いたの？最初からここが空洞なわけじゃないでしょ？」

最初からこんな所に空洞があるわけが無い。もし、あつたならこの上はとつくに崩れ落ちてくるはずだ。というか、今、この状況で崩れ落ちてこないのもおかしい。

「ああ、それはな、穴を作る事ができる能力者が居てな、そいつに

作ってもらったんだ」

「へえ、なんか世の中能力者だけでどうにかなりそうだな」

「その考えが行き過ぎちまった奴らがいるんだがな」

バドは少し表情を暗くする。というか、周り皆がなんだか暗い顔になる。

「どんな奴らなんだ？」

「そいつらはな・・・非能力者の存在を認めない奴らさ。奴らは非能力者が能力を持たない事をいい事に、虐殺をしまくってやがる。ま、その逆も居るけどな」

な、なんかヘヴィな話だな・・・胸糞悪い。自分達が力を持つてゐるだけで、罪のない人を殺しやがるのか・・・。なんだかクラスのいじめっ子みたいながきな奴だな。

「なんか嫌な話だな・・・。その逆って事は、能力者を忌み嫌ってゐる奴も居るって事だな？」

「そういう事だ」

なんだかこの世界の状況が少し分かってきた気がする。今までモンスターとかの情報しか聞いていなかったが、この世界の状況も複雑なんだな。

「うし、話が一段落したところで宿に案内するぜ」

まだ仲間になるって決めたわけじゃないんだけどな・・・。思ったが口にはださない。フレイヤさん達との旅で身に付けたスキル『余計な事は言わない』を発動させる。今、ここで外に放り出されても困る。なんとたつて俺は地理に詳しくない。首も痛いから、魔物に襲われて無事な保障もないし。せめて、明日になつてからにしよう。

俺はバドが先に歩き出してしまったので、後を追って走った。

アジト（後書き）

なんだか本当に更新遅れて申し訳ないです；

さて、いきなり話を勝手に変えて・・・最近自分の小説を読んで、数ヶ月前のものなどを読んでいると恥ずかしくなります。そんなところも踏まえて（？）評価してくださると、うれしいです。
by 物書きとしての才能が微塵も感じられない男

変人

「ん？その坊やがここに住むの？」

「ああ、しばらくここに置いておく事になると思うが、よろしくたのむぜ」

なにやら俺の住む場所の事で話している。てか、『しばらく』とか勝手に言ってるし……。俺はまだ、仲間になると言っただ訳ではない。なら、明日に出て行くことになるかもしれないのだ。

だが、バドと宿の女性はなにやら勝手に色々決めてるっぽい。勘弁してくれ……。と、俺は頭を抱える。と、その様子を見てなにやら小さい女の子が近づいてきた。

白いワンピースを着ているためか、なんとも儚げな印象を受けた。

「頭、痛いのか？」

どうやら俺の体を心配してくれてるらしい。

「ん？大丈夫だよ。色々な意味で頭痛いけどね」

「？」

俺の説明の仕方では分からないらしい。

「とにかく、大丈夫だよ。心配ない」

俺は微笑んであげると、少女も微笑み、宿の中に入っていった。すると、中からバドが出てきた。

「おし、お前は今日からここで住む事になった」

ええ、なんか本人の意思まるで関係なしで話が進んでるんですが……。

「あ、あのさ、俺、まだあんたらの仲間になるって決めたわけじゃないか……」

「やあ！『神々の瞳』を持った少年が来たそうじゃないか！」

俺が自分の意思をハッキリ示そうとした矢先に変な輩が飛び込んできた。

「まずはこの僕に挨拶するべきじゃないのかい！？いや、わかった

よ。僕なんてどうでもいいんだね！？そうか・・・でもね！僕が居なきゃこのアジトはできなかったんだよ！？君達はもつと僕を敬うべきだね！」

・・・おいおい、なんだか頭の中身が愉快的な人が現れたぞ。

「おいシエルファ。お前五月蠅い」

バドが片手を額に当てて、呆れたポーズ。そりゃあそうだよな。バド達の仲間なら、このアジトに一緒に居るわけだし。

「バド！！よりもよって僕に対して五月蠅いと！？おいおい、それは少し酷いんじゃないかい？それになんだい？その呆れたポーズは！！まったく・・・あ！またヒゲを剃ってないね！早く不潔なヒゲもどうにかしたらどうだい？それにね、僕の事を呼び捨てにするのは止めたまえ！そうだね、今度から僕に敬意を表してシエルファ様と呼ぶことに・・・ブ！」

息もしていないであろうスピードで喋っている途中に、バドにぶっ飛ばされてしまっている。

「何で俺がお前なんぞに様を付けなきゃならねんだよ」

「い、いいパンチを放つじゃないか・・・。だけどね！その程度じやまだまだだよ！僕には全然ダメージなんてないのだから！」

「なら、その顔をもう何発か殴っていいか？」

そう言いながらバドは拳を振り上げる。

「ハハハ、何を言っているんだい！？僕の美しい顔を殴るだって？ハッ！もう痛いので勘弁してください」

・・・いきなり腰の位置が低くなつたな・・・。てか、こいつ弱っ！

「わかればよろしい。で、何しに来た？」

「さっき言っただじゃないか！僕への挨拶がないから僕からわざわざ出向いてあげたのさ！」

「わかった。じゃあ帰れ」

バドは痛い男を軽くあしらうと、俺の背中を押してくる。

「ほら、お前の部屋に案内してやるよ。あんな五月蠅いのに付き合

「つてらんねえ」

俺は自分の意見を言う暇もなく、部屋へ案内された。

「なかなかだろ？お前の部屋は」

なぜか勝手に俺の部屋にされてしまった場所は、血だらけだった。

アースガルド（前書き）

ずいぶん待たせて申し訳ありません。

いろいろありまして、続きを書く事ができませんでした。
続きをお待ちしていた方、申し訳御座いませんでした。

アースガルド

ああゝあ。報告です。なぜか、俺の部屋になる予定だった部屋が、突如血まみれ状態になつてゐる事が発覚。というか、まず問題なのが、俺はいつからあんたらの仲間になつたんだ？」

「今」

ふう、あゝ、この人達は俺には扱えない。

んゝ相手はどうやら日本語を解せ無いらしい……。あ、ここは異世界だから、俺が話している言葉が日本語かどうかは分からないのか。

「んで？他に質問は？無いな？」

「はい、何故俺の部屋は血だらけなんだ？怪しいだろ、明らかに」

「ああ、ちよつとした事件だよ。大丈夫、うちには優秀な奴がいるからな。そいつが解決するさ。あ、もちろんこの部屋もちゃんと綺麗にするから心配しないでくれ」

そのあと、この部屋に何人かの男が入ってなにやら話し合つていた……。

いつのまにかに丸め込まれて、俺はどうやらこいつらの組織の一員になつたらしい。

いや、もちろん俺にはそんな自覚ありはしない。

などと考えながら綺麗にされた部屋を見てこれからの生活について考えた。

このへんな組織、だいたい何のための組織で、何に対して敵対しているのかも不明だ。

俺は綺麗にしてあるベットにどつと倒れこんだ。そして今までの

疲れが出てきたのか、そのまま眠ってしまった。

「あゝ！手がかりなんて何にもないじゃない！」

エリサが少しヒステリック気味に叫ぶ気持ちもわからないでもない。部屋の中にはまるで手がかりなどありはしない。私は探偵ではないので連れ去り事件を解決できるだけの頭脳を持っているわけでもない。

「とりあえず外にしよう。外になら手がかりがあるかもしれないかな」

私がそう言うとエリサとアリサは頷いて部屋を出た。

「なんもない・・・」

エリサは宿の外にでて発した言葉がそれだ。甘いな。エリサはもう少し冷静に周りを見回して欲しい。それが出来ればこの子はもっと強くなるだろう。

「良く見るんだよエリサ。何も手がかりがないというわけじゃない」
私はそういうと地面を指差した。

「馬車の跡ですか？」

そう、下には明らかに馬車を通ったあとが有る。これは私にとって充分すぎるほどの手がかりだ。

「でもフレイヤさん。馬車なんてこの町にはいくつもあるだろうし、第一トキを攫った奴が馬車を用意していたとは限らないじゃないですか」

「いいかい？私達を眠らせたのは一人だが、共犯が居なかったと考えるのは早すぎる。つまりは、私達を眠らせたあと、なんらかの合図で仲間に宿の下に馬車を用意させればいい。そうすれば私達に気づかれる事無く馬車を下に持ってこれる。宿の支配人などの人たちも全員寝ていたしな」

「でも、馬車をあとから持ってくる必要はあるんですか？別に最初

から乗ってきても良いと思うんですけど」

「確かに、普通なら馬車に乗ってきてその後から私達を眠らせてトキを攫った所でなんの問題もないだろう。でもね、私なら馬車に乗った能力者がここでおりた事に気づく事ができるかもしれない。相手としては、危ない橋を渡る必要は無いだろう？それに、馬車のあの五月蠅い音がこの下で止まれば、誰だって警戒をさらに強める。だから相手は徒歩できた。おそらく私を警戒してだろうな」

だが疑問は残る。なぜ私の存在に気づいていたのだろうか？『奴』の仲間なら私を警戒していて当たり前だろう。しかし、『奴』に仲間が居る事はないだろう。そう考えると、私達の情報が漏れている？

「なんでフレイヤさんが居る事を知っていたんでしょうね・・・。もしかして、フレイヤさん、有名人ですか？」

ちよつとニヤリとからかうような目をする。案外、勘がいいのかも知れないな。

「さあ？知っている奴は知ってるんじゃないか？」
少し目に力を入れてエリサを見る。その目をみてエリサはこれ以上何も言ってこなかった。

「さて、資料によるとお前はまだ能力を扱いきれてないらしいな」
俺の指導係らしい人はなにやら紙を見ながらペンを回している。
見た目は30後半くらいだろうか。背はそんなに高くはないが、結構筋肉はついてるみたいだ。ムキムキではないが、少し離れた場所からでもわかる。

「ていうか、なんで訓練することになってるんだよ・・・」
「それはお前が『神々の瞳』を持ちながら強くないからだだろう。お前には我々のためにも強くなつて貰わなければならない」

「俺はまだあんた達の仲間になるとか決めていないし。いきなり誘拐されて俺は迷惑してるんだぞ？」

眉間にしわを寄せて不快だということをアピールする。だが俺の

目の前に居る人はそんなことお構いなしのようだ。

「今ごろそんな事を言ったって仕方のないことだろ？誘拐はお前を助ける意味合いもあったのだ。我々の組織の一員となり、ここで生活し、ここで訓練する。拒めばお前には死が待っている」

指導係の人は一步一步俺との間合いを詰めてくる。表情がなくて、威圧感を感じる。

「なんだ？ずいぶんと意味深の言葉だな・・・」

そう言いながら俺は後ろに下がる。

「それはそうだろう。もうお前には我々のアジトがばれている。ただで帰すと思うのか？奴や、奴らが『神々の瞳』を持つ物が我々の組織の者に攫われたのを知っていたら？おそらく普通に今まで通りに暮らしていたら殺されるだろう」

そついいながら体からオーラを発し、さらに俺との間合いを詰める。

「どつちにしろ、殺されるというわけか。じゃあ質問だ。お前らの組織はなんのための組織なんだ？なんの利益のための組織なんだ？」

どう考えてもなにやら危険な事をしているのだろう。「アジトを知られたから、もう抜ける事はできない」ってな感じの発言だ。

「うむ、私の威圧感を感じ取り、私の発言の意味を理解したのだな。賢明な判断だ。よろう。我々の組織の名は『アースガルド』。『

ヨトウンヘイム』と敵対する組織だ」

「ヨトウンヘイム？」

「そうだ。奴らはリーダーの目的を実現させるために作られた組織だ」

「その『ヨトウンヘイム』のリーダーの目的ってなんだ？」

「さあな？我々はその目的を知らない。が、奴らは人の村や町を襲っている。快樂殺人者が多い組織だ」

なるほど。少しこの世界がどういう事になっているのか理解できてきたぞ。

「奴らに家族や恋人。大切なモノを奪われた者達が元となって作ら

れたのが我々の組織だ。今はそれだけでは構成されていないがな」

ある程度の説明を受け、今、俺の居るこの世界がどういう状態なのか分ってきた。

けど、どうしよう。フレイヤさん達心配してるかな？それに、なんかここでも訓練するみたいだし。多分人間の組織と敵対しているのだろう。ということは人を殺さなければならぬ時が来るのかもしれない。

俺は不安を胸に秘めながらこれからの生活を考えていた。

アースガルド（後書き）

さて、血まみれになった部屋。その謎は別の短編小説で形にしたい
と思いますので、「期待させる終わり方で終ってたくせに、それだ
けかよっ!」とお怒りの方は、もうしばらくお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1371a/>

神々の瞳

2010年10月10日13時46分発行